

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

創刊号

特集： 渡辺三三旧蔵資料の研究

・ 渡辺三三の撫順史研究 ～植民地支配と歴史学～	1
片桐昂大 梅田拓海 岡本優奈 辻 龍成 江崎晃定 土田真菜 神谷 樹 臼田真之 西部寛太	
・ 撫順東方における歴史観光構想とその挫折 ～まぼろしに終わった歴史ツーリズムを読み解く～	
江崎晃定 梅田拓海 片桐昂大 辻 龍成 岡本優奈 土田真菜 石原伶緒 吉川奎騎	16
・ 東洋史家渡辺三三の業績とその生涯 関高等学校地域研究部	26
・ 満州の抗日武装組織とその掃討作戦 江崎晃定	29
・ 世界遺産都市 集安周辺の地図研究 那須円香	37
・ 渡辺三三旧蔵資料の研究経緯（関高SGH情報より）	39
・ 後記	50

2020年3月31日

わたなべさんぞう

渡辺三三の撫順史研究

～植民地支配と歴史学～

岐阜県立関高等学校地域研究部

片桐昂大 梅田拓海 岡本優奈 辻 龍成 江崎晃定
土田真菜 神谷 樹 臼田真之 西部寛太



目 次

はじめに ～研究の経緯～	2
渡辺の研究活動を追う ～命がけだった史跡踏査～	
＜渡満から満州事変までの動向 1923～1931＞	2
＜満州事変から敗戦までの動向 1931～1945＞	3
旧満州をめぐる渡辺の歴史観	
＜研究、教育、文化財保護への情熱＞	5
＜『撫順史話』にみる渡辺の歴史観＞	5
抗日パルチザンの後退と渡辺の東進	5
おわりに	6
資料・参考文献・謝辞	7

旧蔵資料の実測・撮影・分析については片桐・梅田・岡本・辻・江崎・土田・神谷が、近代史的背景に関する資料収集・分析・考察については臼田・西部が、それぞれ担当して資料化・文章化した。本稿の編集は片桐が行った。

はじめに ～研究の経緯～

2017年12月から2018年にかけて、岐阜県立関高等学校地域研究部（以下、地研部と略）は、岐阜県出身の歴史家、渡辺三三（1890～1977）の旧蔵資料の調査を行った。

渡辺は、終戦まで撫順を中心に活動し、高句麗や女真の研究に功績を遺した人物である。昨年、孫にあたる渡辺充氏が、自宅に保管されていた資料の一部を、岐阜県博物館（以下、県博と略）に寄託した。かねてから県博と連携していた地研部は、渡辺家と協議を重ねながら資料の研究を行うことに決定した。研究計画は以下の通りである。

- ① 旧蔵資料は関高校が一時的に預かり、地研部員が調査を行う。
- ② 旧蔵資料の保管・活用に関しては、県博・関高校・渡辺家の三者で話し合う。
- ③ 研究成果を積極的に発表する。同時に、県博で企画展を開催する。

まず①に関しては、地研部員が渡辺家を訪問し、写真や書籍を一時預かることにした。次に②に関しては、資料の重要性を考慮し、専門研究者が常駐する九州大学総合研究博物館への寄贈を決定した。さらに中国・韓国の研究機関に、データを送ることを協議している。③に関しては、2018年度日本考古学協会総会高校生ポスターセッションや、2018年度全国高等学校歴史学フォーラム（九州国立博物館）での発表を行った。

また、普及活動の一環として、県博（2018年9月11日～10月21日）、岐阜県図書館（2018年11月13日～25日）で、それぞれ企画展を計画した。県博では9月29日に、公開講座（地研部の発表、寺内威太郎明治大学教授の講演）も行う予定である。図書館には、渡辺が踏査に使用した陸軍参謀本部作成地図の複製が保管されているので、同時に展示する予定である。

私たちの研究は、遺物実測や写真・文献の精査から始まった。学会での発表内容も貴重な資料の再評価や保全・活用が中心であった。しかし、次第に研究を深める中で、渡辺が活動した時代的背景にまで踏み込んで研究を行うようになった。当初は文化財の調査や保全をテーマに活動していたが、おのずと近代史の研究に軸足を移していたのである。今回の研究では、渡辺の業績を振り返りつつ、植民地支配と歴史学の関わりについて、特に渡辺の歴史観やその歴史的背景について考察を行う。

渡辺の研究活動を追う ～命がけの史跡踏査～

<渡満から満州事変までの動向 1923～1931>

1890（明治23）年、岐阜県安八郡輪之内町に生まれた渡辺は、岐阜師範学校（岐阜大学教育学部の前身）を卒業し、県内各地の小学校で教鞭をとった。1923（大正11）年、33歳になった渡辺は、旧満州に渡り、撫順の永安小学校、東七条小学校で教壇に立つ。

なにゆえ旧満州に日本人学校が存在したのかといえば、話は1905（明治38）年のポーツマス講和条約締結にまでさかのぼる。この条約で日本は、関東州の租借権、東清鉄道（長春～旅順）の経営権をロシアより譲渡された。これにより鉄道付属地の撫順は炭鉱の街として栄え、結果、多くの日本人が移住した。初等教育の拡充は、日本人居留民の激増に伴って必要とされたのであり、各地に建設された小学校の教員不足を補うため、内地の教員が募集・動員に応じ渡満した。渡辺もこうした教員のひとりであった。

渡辺の研究活動は満州事変（1931.9）以後、活発化する。事変以前、果たして渡辺がどの程度の研究をおこなっていたのか判然としないが、今回、その当時の活動を物語る資料が発見された（資料1－考古遺物）。

ラベルを付した遺物がそれであり、その一部からは採集日や採集場所を知ることができる。石包丁（「望海窩（塙）」「昭41128」）、環状石斧（「望海窩（塙）」「昭41128」）、磨製石斧（「昭5119」）、磨製石斧（「412」）の計4点に、それぞれカッコ内に付した文字が読み取れる。ラベルにも登場する望海塙は、戦前から日本人によく知られていた遺跡で、日本の直轄領だった関東州金州区に所在する（文献18・22・23）。

渡辺が渡満した1923（大正11）年当時、旧満州の治安は決してよいとは言えない状態にあった。前年、日本はシベリア出兵を断念して撤退、これに伴い、パルチザン（補注）に参加していた朝鮮人活動家はソ連側によって武装解除された。結果、独立を望む活動家の中には、旧満州の延吉・磐石を中心に、共産主義青年組織を結成する者もいた（文献16）。

当初、渡辺の活動範囲は、勤務地の撫順及び満鉄沿線の比較的治安のよい地域に限られていたようだ。石器に付されたラベルは、当時の渡辺の活動範囲を物語る。

すでにこの時期、渡辺の活動は、現地の治安当局や撫順炭鉱の保護下に置かれるようになった。1929（昭和4）年、撫順郊外の明代遼東辺牆踏査の際には、「匪賊」の害を用心するため、警護付きの活動を行ったことが記録されている。「排日の旺盛な当時」「単独調査は危険」であったため、「郊外探査の際はいつも警官及撫順炭坑労務関係」で「用心棒」を用立ててもらったというのである（文献4）。

渡辺の情熱を疑うものではないが、史跡の保全・活用と研究の遂行という目的を達成するため、渡辺自身も当局に積極的に接近した可能性は否定できない。

補注：パルチザンとは、占領軍等に抵抗した非正規兵士を指す。ゲリラとほぼ同義語。

<満州事変から敗戦までの動向 1931～1945>

1931（昭和6）年9月、日本軍による軍事行動によって始まった満州事変により、日本軍の勢力は一気に旧満州全土におよんだ。結果、1932（昭和7）年、満州国が建国されることになり、渡辺の研究者としての活動範囲も広がることとなった。

1933（昭和8）年 5月5日、撫順郊外の高爾山遠足中に古代の土塁を発見、これが北関山城の発見につながった（資料6-地図2）。文献精査と現地踏査を経て、渡辺はこの山城を、史書や碑文にあらわれる高句麗の「新城」に比定した。335年、撫順の玄菟郡治（永安公園土城）を征服した高句麗は、渾河対岸北方の山塊に山城を築き「新城」と命名した（『三国史記』高句麗本紀故国原王5年）。踏査成果は早くも同年に論文発表されている（文献1）。この論文の抜刷は渡辺家に保管されていた。

1935（昭和10）年 11月、満州国皇帝溥儀の招きによって、かつて家庭教師だった英国人レジナルド・ジョンストンが訪満。外交官であり東洋学者であったジョンストンは、清朝初期の史跡探訪を希望、満州国当局は現地の事情に通じた渡辺に案内役を依頼する。当時、渡辺氏は奉天の敷島小学校の教員。国賓の案内人としては異例かもしれないが、すでにこの時期の渡辺は、現地における第一人者であったということであろう。

ジョンストンは11月8・9日、清朝初期の史跡を見学。しかし、治安には不安があったようで、兵士に警護されたトラック1台が先駆してバスを警護している。渡辺はこの小旅行を「興京二夜」という一文にまとめ、雑誌『満蒙』2月号（文献3）に寄稿した。『満蒙』には、渡辺・ジョンストン・程明超の3人の記念写真が掲載されている（写真資料2）。この写真の実物は渡辺家に保管されていた。許可を得てアルバムから剥がすと、裏面に、ジョンストンと渡辺のサインが残されていた（写真資料1）。

1938（昭和 13）年 長年に渡る撫順史研究の成果を『撫順史話』（文献 4）にまとめ上梓した。さらに渡辺はこの年、黒竜江省の綏化小学校校長から満州国国立撫順図書館長に就任する。一教師から、満州国の文教政策の一角を担う重職に転身したのである。

この時期、前年に始まった日中戦争の影響で、旧満州の日本軍とパルチザンの抗争も激しくなり、軍の出動範囲も拡大した。図書館長就任と戦火の拡大により、軍に守られた渡辺のフィールドは、念願の撫順東方の山岳地帯へと広がることとなった。

1939（昭和 14）年 1936（昭和 11）年、永安公園内誉丘から漢代遺物が出土（千秋萬歳銘瓦等）し、この地が漢代土城であり、史書にいう玄菟郡治（第三次）と推測されるにいたる（資料 6 - 地図 2）。のちに渡辺は斎藤武一とともに、この土城や北関山城出土の瓦に就いての論考をまとめ報告している（文献 6）。このほか、渡辺家には銅鏃 4 点（資料 1 - 考古遺物）が保管されていた。銅鏃の形態や文献 4・6 から、誉丘出土遺物と判断できる。

渡辺家にはこの年に撮影された蘇子河畔での写真が保管されていた（写真資料 3）。裏面に、1939（昭和 14）年 10 月 15 日の日付がある。前列中央が渡辺。その左に撫順新報社長の窪田利平。当局によりパルチザン掃討が進められていたとはいえ、踏査には警護が必要だった。当局の全面支援を受けた研究体制であったことを象徴する写真である。

1940（昭和 15）年 9 月 撫順東方の鉄背山城踏査の記念写真（写真資料 4）。鉄背山城は、ヌルハチが興京防衛のために築かせた要塞であった（文献 12）。右から 3 人目が清朝史の権威、和田清東京帝国大学教授。1940（昭和 15）年 9 月 25 日の日付がある。

1940（昭和 15）年 10 月 2 日～15 日 渡辺は池内宏や三上次男とともに北関山城の発掘調査に参加（文献 15）。高句麗山城に関する初の発掘調査であり、戦後、中国側による再調査も行われている。渡辺家にはこの時の写真が保管されていた（写真資料 5）。裏面に 1940（昭和 15）年 10 月 15 日の日付が残る（発掘終了日）。前列中央が池内宏。後列中央に渡辺。後方に、戦後の東北考古学を主導した李文信の姿も見える。

1941（昭和 16）年 裏面に 8 月 10 日の日付がある。床の間を背にリュックを携えた姿で撮影（写真資料 6）。「古城子踏査」との記載があるが、ここにいう古城子とは、桓仁の地名を指すと考えられる。陸軍参謀本部の十万分の一地図（懷仁）にある「古城子」の地名を手がかりに、8 月 10～20 日にかけて、踏査を行ったと推測される（資料 7 - 地図 3）。

1940 年、渡辺は永陵南郊で漢代土城を発見した。永陵をはじめて訪れたのが 1935 年であるから、フィールドが確実に拡大していった経緯がうかがわれる。パルチザンの勢力は後退しつつあったが、桓仁の治安は楽観視できるものではなく、相当の決意で臨んだのではないか。この写真のみ絹目高級紙が使われている。もちろん想像の域を出ないが、「不測の事態」を考えて「遺影」として撮影されたのかもしれない、と我々は考えた。

この年の 12 月、日本は日中戦争の打開策を見いだせないまま太平洋戦争に突入した。

1944（昭和 19）年 敗色濃厚になった 1944 年も、渡辺は精力的に研究を続けていた。北関山城二次調査（5 月 19～27 日）、陳相屯塔山の高句麗山城踏査（5 月 28 日）、桓仁方面の遺跡踏査（6 月 1～5 日、資料 5 - 地図 1）と、矢継ぎ早に調査が行われている（文献 14・15）。

敗戦と帰国 1945（昭和 20）年 8 月の敗戦にともない、渡辺もそれまでの地位を失った。1947（昭和 20）年に帰国し、故郷の安八郡輪之内町の生家に帰った。戦後は旧満州の歴史研究からは離れ、輪之内町の町史編纂事業等に携わった。1977（昭和 52）年死去。

旧満州をめぐる渡辺の歴史観

本章では、渡辺の著作をもとに、渡辺自身の歴史観に関し考察を加える。

<研究、教育、文化財保護への情熱>

渡辺は、史跡保存の現状に対する不満や憤りを憚ることなく露わにしている。『撫順史話』では、北関山城において現地の農民が遺構の一部を耕作で破壊している現状を嘆いているし、「興京二夜」(『満蒙』1936.2 掲載)では、永陵の荒廃ぶりに憤り、「畏れ多き通り越して、是が多年あこがれてゐた永陵であったかと疑って見たくなった、と共に満州国当事者は一体何処に何を標準に王道樂土を建設しようといふのかと質問したくなった」と、かなり踏み込んだ批判を行なっている(文献3・4)。

満州国建国の大義のひとつが、満州族の民族自決に求められるならば、皇帝溥儀の遠祖を祀った永陵は、聖地としての威厳を保つべく整備されるべきと主張したかったのかもしれない。歴史や史跡に深い想いを寄せる渡辺の姿勢には偽りはなからう。

そのことは、戦後も郷土輪之内の郷土史研究に尽力したことからも裏打ちされる。生徒を連れての高爾山遠足、撫順中学の教師・生徒の北関山城調査参加等、実地で学ぶ歴史教育にも熱心だったようである。

渡辺は、一教師として郷土史研究に情熱を捧げ、手堅い成果を発表して中央に認められ、国賓ジョンストンの案内役を務めるまでにいたった。さらに国立図書館長となり、帝大研究者の先導者となった渡辺は、まさに「東満州の史跡案内人」と呼ぶにふさわしい。

<『撫順史話』にみる渡辺の歴史観>

渡辺の研究成果は『撫順史話』にまとめられている(文献4)。章立ては、「先史」「漢代・玄菟郡」「高句麗山城」「千三百年前の我国防と新城」「撫順塔」「辺牆」「撫順城」「撫順馬市」「ヌルハチ」「サルフの戦い」「奉天会戦」「永安橋」「撫順炭坑」の順となっている。読み進めると全体を貫くテーマがはっきりと見えてくる。

それは、固有満州民族(高句麗・渤海・女真等)と周辺民族(漢・蒙古等)の興亡史を、地政学的観点から描き出すものであり、時流に乗ったいわゆる満鮮史観であった(文献21)。すなわち、その時々覇権国家が満州を支配することこそが、満鮮史の本質であり、日清・日露に勝利した日本帝国が、満州民族の溥儀を国家元首に据える満州国を支援することは、歴史的にみて、理にかなった行為とする歴史観である。

以下、満鮮史観にのっとった歴史解釈の具体的事例を二例挙げておく。

「千三百年前の我国防」と新城 渡辺は、高句麗新城を隋唐帝国の侵攻に対する我が国の「国防の最前線」だと主張する。確かに、他国の領土と言えども、高句麗が抜かれれば倭国も危機に瀕する。しかしこれには、渡辺の別の意図があったのではないかと考える。一つに、満州国建国の意義である。満州国をかつての高句麗と重ね合わせ、蒋介石政権やソ連邦を牽制することが可能と言いたいのであろう。

女真の興起と近代日本軍 明の抑圧をはねのけて拡大する女真の活躍ぶりは、日露戦争時にロシア軍を南満州から駆逐した日本軍の行動と重ね合わせるかのように描かれている。渡辺は自己の想念世界の中で、中原勢力と争った高句麗や、明を破って中国を支配した清と、日清・日露を通して満州経営に乗り出した日本を重ねているのである。

抗日パルチザンの後退と渡辺の東進

渡辺が関心を抱いた撫順東方の地は、「匪賊」の跋扈する地として知られていた。反体制

勢力である「匪賊」の中には、群盗や武装農民、民族派組織等、様々な集団が含まれるが、日本当局を最も悩ませたのは、中国共産党指導下の抗日パルチザンであった（文献 11・16・19・20）。

撫順周辺で活動したパルチザンの指導者に、楊靖宇（1905-1940）がいる。

1929 年、中国共産党より旧満州に派遣され、1932 年 5 月には、東北人民革命軍第一独立師の師団長兼政治委員、34 年末には南満洲遊撃区を管轄する第一軍軍長に就任。配下には朝鮮人兵士が多く、桓仁や興京で激しい戦闘を繰り広げた。撫順東方の史跡調査をめざす渡辺を悩ませた「共匪」とは、楊靖宇配下の人民革命軍兵士たちだった。

1936 年 3 月、東北人民革命軍は、傘下の組織を拡大して東北抗日連軍と改称し、さらに攻勢を強めた。これに手を焼いた日本軍は、山間地の集落を閉じさせて平地の集団部落に強制移住させた。山間地の村々がパルチザンの拠点となることを恐れて焼き払ったのである。日本軍は航空機を動員した掃討作戦を繰り広げ、集団部落制度をさらに徹底した。

掃討作戦は功を奏し、パルチザンは追い詰められ、楊靖宇も 1940 年 2 月に射殺された。解剖された胃の中には、木の皮や草の根しかなかったという。生き延びたパルチザンはソ連領に逃れ、1941 年 1 月までに抗日連軍の組織的活動は終了した。

撫順から永陵、興京、桓仁へ。当然のことではあるが、渡辺がフィールドを東方へと拡大した時期は、抗日連軍の勢力後退・崩壊期とおおむね重なる。

おわりに

渡辺の調査は常に危険と隣り合わせであり、軍警に守られてようやく成り立つものだった。命がけの学問的情熱には頭が下がるが、「匪賊」と呼ばれたパルチザンも、祖国の独立回復のために一身を投げ打った人々である。そうした歴史を学ぶ中で、厳しい環境下に置かれた当時の人々の労苦を知った。近代史に関しては、まだまだ勉強不足の私たちであるが、考古学・前近代史を学ぶと同時に、近代史にも真摯に向き合っていこうと思う。

渡辺三三旧蔵資料は、歴史探究の楽しさを私たちに教えてくれた。それと同時に、戦争や植民地統治と学問の関わりを、受けとめ考える機会も与えてくれた。研究を続ける最中、私たちは仲間うちで、いつしか、渡辺三三のことを「三三さん」と親しみを込めて呼ぶようになった。帝大研究者やジョンストンがそうであったように、私たちも「三三さん」にいざなわれて、旧満州の歴史に親しんだ。その意味ではまさに東アジア史の案内人である。

今年は日中平和友好条約締結四十周年記念の年でもある。つたない研究ではあるが、中国や韓国の関係機関にデータを送り、埋もれていた貴重な資料を東アジア各国で共有したいと思う。

最後に、この研究を行うに当たって、貴重な機会を与えていただいた渡辺充氏、活動の場と数々の助言をくださった岐阜県博物館、研究発表に協力していただいた日本考古学協会及び九州国立博物館、資料受け入れを快諾してくださった九州大学総合研究博物館の皆様に、心より感謝を申し上げたい。

【資料 1－考古遺物】

石器類の一部に、1929（昭和 4）年・1930（昭和 5）年に、望海窩（望海塙）で採集されたことが記されている。望海塙遺跡は、日本でも戦前から知られていた遺跡であり、戦後、中国も調査を行っている。基本的には紀元前 2 千年紀後半の双砣子 3 期文化の遺跡である。いずれも典型的な遼東系磨製石器であり、弥生時代の大陸系磨製石器の祖型にあたるものである。

渡辺が、望海塙遺跡もしくは同じ遼東地域の新石器時代遺跡で採集したものと考えられる。渡辺の関心はおもに漢代以降であり、新石器については熱心に探究した形跡はない。満州国建国以前の段階においては、比較的治安のよい満鉄付属地内の遺跡の踏査等をおこなっていたものとみられる。

銅鏃 4 点は、漢代青銅製の三翼鏃と考えられる。渡辺の著作に、撫順の漢代土城で「漢代銅鏃」を発掘したとの報告がある。誉丘（永安公園）の出土品と考えられる。

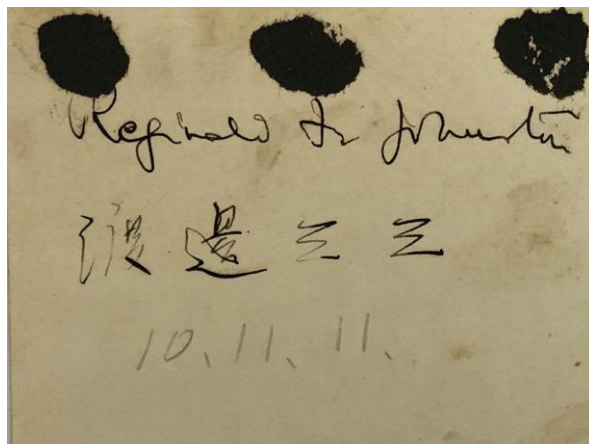
	器 種	形 状	時 代	長×幅×厚（mm）	重 量	ラベル表記・採集場所
1	石包丁	破片	新石器時代	70×(48)×7	34.4	
2	石包丁	破片 石戈の 再利用か	新石器時代	(87)×49×11	68.1	望海塙 昭和 4 年 11 月 28 日
3	環状石斧	破片	新石器時代	100×43×13.5	76.2	望海塙 昭和 4 年 11 月 28 日
4	磨製石斧	完形品	新石器時代	63×36×15	64.6	石斧 昭和 5 年 11 月 9 日
5	磨製石斧	完形品	新石器時代	125×66×26	420.2	
6	磨製石斧	破片 蛤刃	新石器時代	(88)×63×30	357.3	
7	磨製石斧	破片 蛤刃	新石器時代	(76)×49×66	421.1	
8	磨製石斧	完形品	新石器時代	88×63×30	218.3	
9	磨製石斧	完形品	新石器時代	107×68×27	345.4	昭和 4 年 12 月
10	銅 鏃	三翼	漢 代	19×9.1×6	2.5	撫順誉丘出土
11	銅 鏃	三翼 鉄製茎	漢 代	28×10×8	5.9	同上
12	銅 鏃	三翼 鉄製茎	漢 代	23.8×8.5×7	2.7	同上
13	銅 鏃	三翼 鉄製茎	漢 代	18.5×9×7.1	3.6	同上

カッコ内は現長

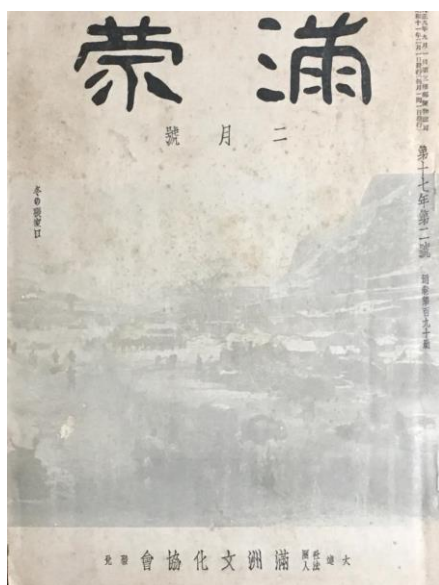


銅鏃（写真左上）と石器類

【資料 2－写真図版 1】

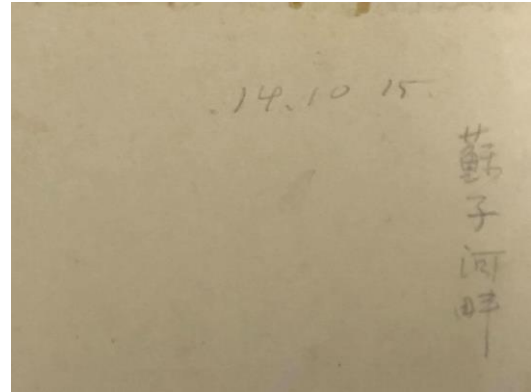


写真資料 1 左から渡辺、ジョンストン、程明超。裏面に 1935（昭和 10）年 11 月 11 日の日付と、ジョンストン、渡辺の署名あり。雑誌『満蒙』（左下写真）に同一写真が掲載されている（右下写真）。

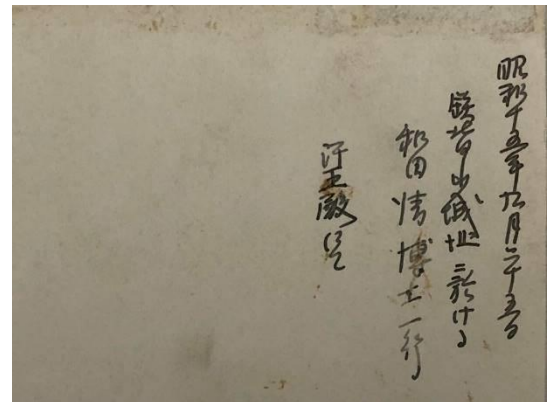


写真資料 2 雑誌『満蒙』（1922～1943）は社団法人満洲文化協会発刊の雑誌。満鉄の協力の下、満鉄調査部の研究成果を毎号掲載したほか、文学や歴史学に関わる文化記事も多い。渡辺は「興京二夜」と題した一文を 1936 年 2 月号に寄稿。1935 年、かつて、愛新覚羅溥儀の家庭教師を務めたレジナルド・ジョンストンが、皇帝となった溥儀の招きで来満した際、清朝初期の史跡を案内した渡辺が紀行文として一文をまとめたものである。

【資料 3－写真図版 2】

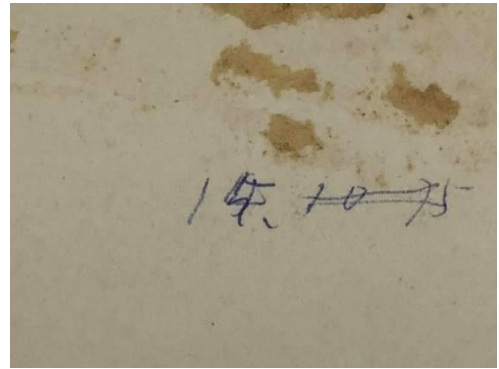


写真資料 3 蘇子河畔での記念写真。軍人もしくは警察官を伴った踏査。1939（昭和 14）年 10 月 15 日の日付あり。前列中央が渡辺。その左に撫順新報社長の窪田利平の姿も見える。蘇子河流域には清朝勃興期の史跡が多く、渡辺の主要なフィールドであった。日本軍の攻勢によりパルチザンは劣勢に追い込まれていたが、踏査には警護が必要だった。撫順新報社・軍警が同行していることから、当局が全面支援した踏査であったことがわかる。

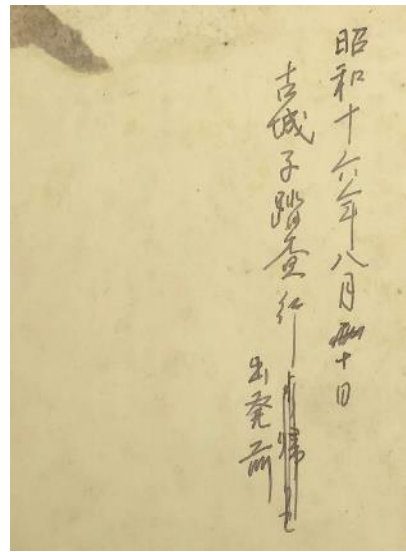
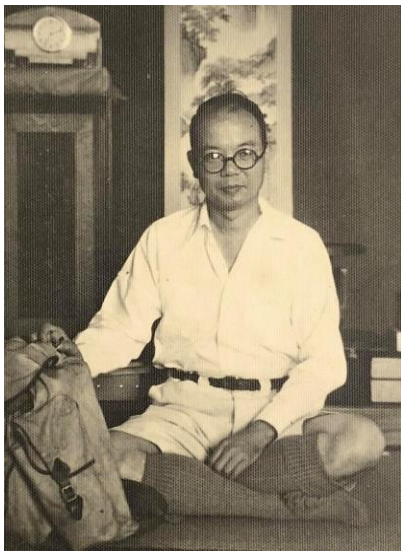


写真資料 4 撫順東方の鉄背山城踏査の記念写真。右から 3 人目が和田清東京帝国大学教授。採集した遺物も写っている。後列左に渡辺、前列左に窪田利平。1940（昭和 15）年 9 月 25 日の日付あり。鉄背山城は、1619 年、ヌルハチが明の大軍を破ったサルフ（薩爾滸）の戦いの舞台のひとつ。興京を守る拠点としてヌルハチにより築城された。サルフ山とは蘇子河を隔てて対峙する。

【資料 4－写真図版 3】



写真資料 5 撫順の北関山城発掘時の記念写真。前列中央が池内宏。後列中央に渡辺。後方に小さく李文信の姿も写る。1940（昭和 15）年 10 月 15 日の日付あり。北関山城報告書（『北関山城』1993）によれば、この日は発掘終了（埋め戻し）の日と記録されている。調査メンバーの顔に安堵感があらわれているようも思える。メンバーの中心人物、三上次男の姿が見えないが、撮影者であるためかも知れない。撫順の玄菟郡治を制圧した高句麗は、北方の山塊に「新城」を築いた（335）。渡辺が発見した山城は高句麗新城の遺跡であり地名から北関山城と命名された。戦後の中国では高爾山山城と通称されている。



写真資料 6 1941（昭和 16）年 8 月 10 日の日付あり。床の間を前にリュックを携えた姿で撮影。「古城子踏査行 出発前」との記載あり。ここにいう古城子とは、桓仁方面の地名を指すと考えられる。1940 年、渡辺は高橋匡四郎とともに、蘇子河畔で漢代土城を発見している。この年も引き続き、漢代土城の調査を行うため、さらに奥地の桓仁の地を訪れたものとみられる（8 月 10～20 日）。治安の悪い地域であったため、相当の決意で臨んだのではないか。この写真のみ、印画紙に絹目の高級紙がつかわれている。こうした渡辺の経験は、のちの三上次男の踏査（1944）に活かされることになる。

【資料 5－地図 1】



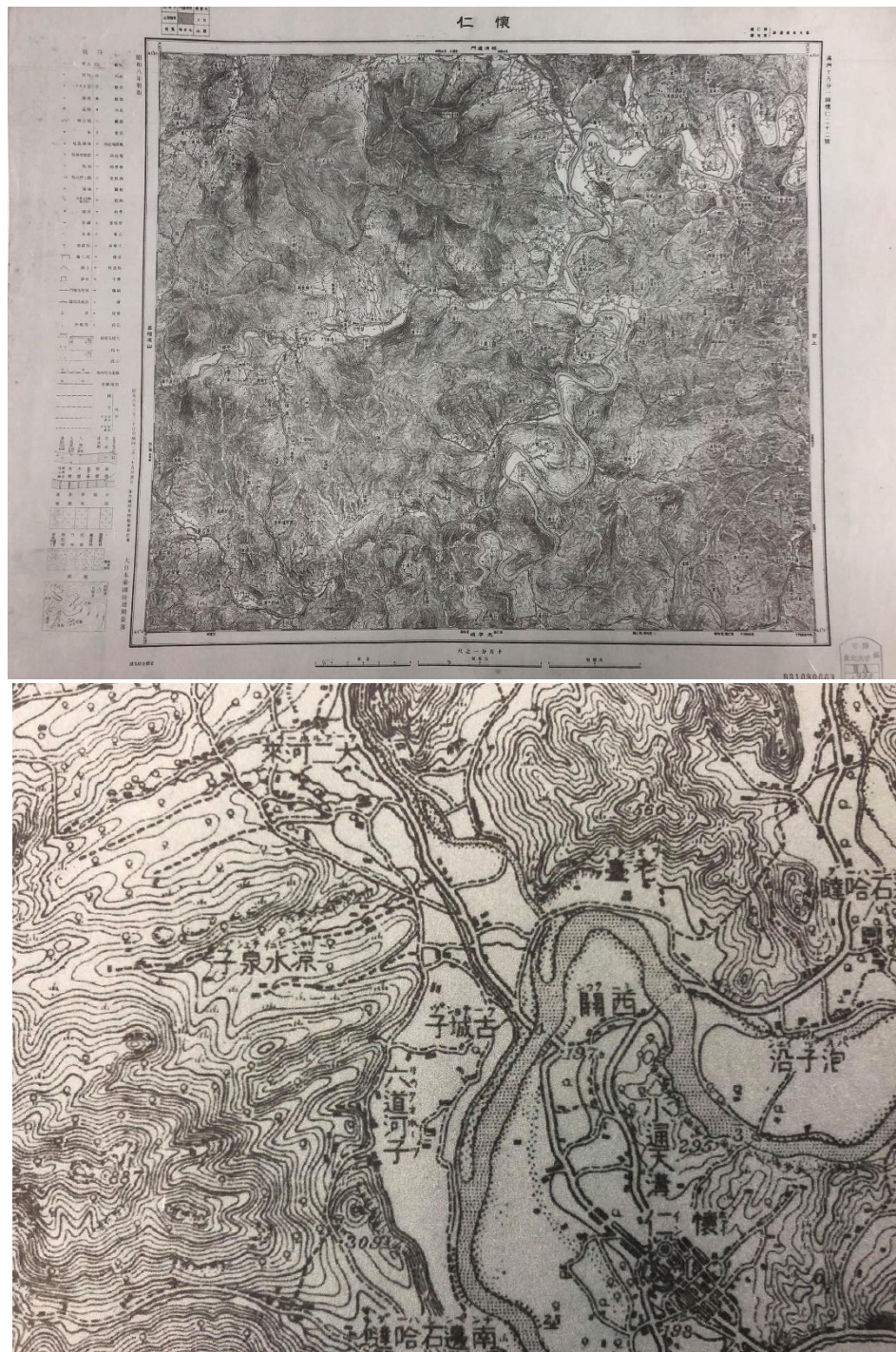
撫順東方の関連地図 撫順は遼東平原と東部山岳地帯の境に位置する。初期清朝の拠点・興京（フエアラ）、高句麗発祥の地・桓仁（卒本）は、撫順の東方、東部山岳地帯に所在する。渡辺は興京、そして桓仁方面をめざし踏査を進めた。写真資料にある通り、ジョンストン、和田清、三上次男らは、渡辺の案内でこのルート上を踏査した。下段の地図は、1944（昭和 19）年 5 月 1 日から 5 日にかけて行われた三上次男の踏査ルートである。

【資料 6－地図 2】



撫順市内地図 上段は現在の撫順市内空撮写真。下段はほぼ同一地点をあらわした旧ソ連製地図（岐阜県図書館所蔵）。空撮写真と地図には、北関山城（高句麗新城）と永安公園土城（第三玄菟郡治）の位置を示した。下段地図は、戦後すぐに旧ソ連が作図したもので、渡辺の活動した時期の撫順市街地の様子を知るうえで貴重である。

【資料 7－地図 3】



満州十万分の一地図「懷仁（桓仁）図福」 日本陸軍参謀本部陸地測量部作製地図（岐阜県図書館所蔵）。1932（昭和 7）年。三上次男「東満風土雜記 高句麗の遺跡をたずねて」（文献 14）によれば、この地図に見える古城子の地名（下段写真中央）をたよりに、下古城子土城を踏査している。渡辺の写真（1941.8.10 撮影、写真資料 6）裏面にある古城子の地名も、この地図の記された古城子をさすものとみられる。

【参考・引用文献一覧】

< 渡辺三三蔵書（抜刷を含む） >

- (1) 渡辺三三『高句麗の新城』奉天図書館叢刊第10冊（1933）
- (2) 『満州読本』財団法人東亜経済調査局（1934）
- (3) 『満蒙』2月号（1936）
- (4) 渡辺三三『撫順史話』撫順新報社（1938）
- (5) 和田清「清の太祖と李成梁との関係」『稲葉博士還暦記念満鮮史論叢』（1938）
- (6) 渡辺三三・斎藤武一「満州国撫順の古瓦に就て」『考古学雑誌』29—11（1939）
- (7) 和田清「清祖発祥の地域について」『池内博士還暦記念東洋史論叢』（1940）
- (8) 『満鮮地理歴史研究報告 第十六』東京帝国大学文学部（1941）
- (9) 園田一亀『明代建州女直史研究（続編）』（1953）
- (10) 「満文老档訳注」『史学雑誌』第61編第8号（1953）

< 歴史学・考古学全般 >

- (11) 澤地久枝『もうひとつの満州』文藝春秋社（1982）
- (12) 岡田英弘「サルフの戦い」『戦』社会思想社（1984）
- (13) 神田信夫・三上次男『東北アジアの民族と歴史（民族の世界史）』山川出版社（1989）
- (14) 三上次男『高句麗と渤海』吉川弘文館（1990）
- (15) 三上次男・田村晃一『北関山城 高爾山山城：高句麗「新城」の調査』中央公論美術出版（1993）
- (16) 姜在彦『満州の朝鮮人パルチザン 1930年代の東満・南満を中心として』青木書店（1993）
- (17) 松浦茂『清の太祖ヌルハチ』白水社（1995）
- (18) 大貫静夫『東北アジアの考古学』同成社（1998）
- (19) 李進熙『高句麗・渤海を行く 新版』青丘文化社（2002）
- (20) 山室信一『キメラ 満州国の肖像 増補版』中公新書（2004）
- (21) 井上直樹『帝国日本と“満鮮史” 大陸政策と朝鮮・満州認識』塙書房（2013）
- (22) 宮本一夫ほか『遼東半島上馬石貝塚の研究』九州大学出版会、（2015）
- (23) 宮本一夫『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社（2017）

【謝辞】

本研究を行うにあたり、渡辺充氏をはじめとする皆様、関係機関の方々にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

渡辺 充 岐阜県博物館 日本考古学協会 九州国立博物館
九州大学総合研究博物館 岐阜県図書館 寺内威太郎
清水信行 中山清隆 宮本一夫 中村慎一 （順不同、敬称略）

撫順東方における歴史観光構想とその挫折

～まぼろしに終わった歴史ツーリズムを読み解く～

岐阜県立関高等学校地域研究部

江崎晃定 梅田拓海 片桐昂大 辻 龍成
岡本優奈 土田真菜 石原伶緒 吉川奎騎



蘇子河流域踏査（1939.10）の記念撮影。前列左から窪田利平、渡辺三三、稲葉岩吉。
本稿に登場する3名の主要人物である。

目 次

1	はじめに	16
2	当初からあった観光開発計画 ～発見された新聞スクラップ～	16
3	新聞記事の分類と分析	17
4	観光計画を立案し、遂行しようとした人々	17
	（1）渡辺三三 （2）窪田利平 （3）稲葉岩吉	
5	観光計画立案とその後の経緯	18
	（1）渡辺・窪田・稲葉の出会いと観光開発計画の構想	18
	（2）満鮮史観から新東亜史観へ	18
	（3）稲葉の死去と池内宏、和田清の登場	19
6	考察と今後の課題	20

1 はじめに ～昨年度の研究概要～

撫順から鴨緑江岸にいたる山岳地帯は、漢代から清朝にいたる史跡の宝庫である。その中でも、遼寧省桓仁県と吉林省集安市の「高句麗の都城と古墳」や、遼寧省撫順市の「初期陵墓・永陵」は、高句麗史や初期清朝史を研究する上で重要な史跡であり、ユネスコ世界文化遺産にも登録されている。こうした史跡には、集客度の高い観光資源として、地域振興の観点から熱い期待が寄せられているが、類似した観光構想は 1930 年代に立案されていた。立案の中心人物は渡辺三三（1890～1977）である。昨年度、私たちは遺物・写真・著作等から彼の足跡を追った。以下はその概要である（注 1）。

渡辺が調査を行った撫順東方は、遺跡の集中地域であると同時に抗日パルチザンの拠点でもあった。1932 年、満州国を建国した日本当局は、パルチザン掃討作戦を本格的に開始した。渡辺は高句麗新城発見（1933）、永陵・興京踏査（1935）、旧老城発掘（1939）、高句麗新城発掘（1941）、吉林古城子・集安踏査（1941）、桓仁踏査（1944）等、めざましい成果を挙げたが、一連の調査は軍警に支えられていた。渡辺の一行は軍が制圧した地域におもむき、軍警に守られて調査を行った。当然、渡辺が活動領域を東方に拡大した時期は、パルチザンの勢力後退期とおおむね重なる。歴史研究と遺跡保全という目的があったにせよ、その行いが国策と密接に結びついていたことを知った私たちは深い衝撃を受けた。

ところがいよいよ研究をまとめ、「全国高校生歴史フォーラム」に提出する段階に入り、さらなる衝撃を受けることとなった。今回の研究は以下のできごとをきっかけに始まる。

2 観光開発計画と鉄道網の整備

昨年 9 月、渡辺充氏（三三の親族）より、新たに新聞スクラップが発見されたとの連絡が入った。新聞記事は計 152 件、うち 84 件が渡辺の署名記事、108 本が撫順の地方紙、撫順新報に掲載された記事である（一覧参照）。文中には、遺跡調査の詳細な報道とともに、観光開発についての言及もある。たとえば、清朝最古の王宮旧老城（フェアラ）発掘の報道には「撫順から鴨緑江岸までの観光コース開発を期待」（1939.6.2）との記載があり、発掘当初から観光開発の思惑があったことが読み取れる。また「満州の奈良」（1939.7.29）との見出しは、永陵を奈良にたとえたわかりやすいアピールである（写真図版参照）。

こうした企画が生まれる背景には、満州・朝鮮を結ぶ鉄道交通網の整備があった。1936 年 2 月、梅河口と集安を結ぶ梅集線工事が開始され、1939 年 10 月には鴨緑江を渡る満浦鉄橋が開通した。これにより、満州国鉄梅集線と鮮鉄満浦線が接続され、満州・朝鮮双方から観光客を誘致することが可能になったのである。日中戦争の本格化とともに、日本政府・軍部は「満鮮一体」「鮮満一如」を掲げ、満州における日本資本を導入した重工業化や、革新官僚主導の近代的経済システムの導入、満蒙開拓団による農業開発を強力に推進する。満州国鉄による鉄道交通網整備もその一環であり、鉄道開通を頼みに企画された撫順東方の歴史観光開発計画は、国策に便乗した地域振興策でもあった。

実際、この当時、満州・朝鮮の日本人学校はもちろんのこと、内地の学校の大陸修学旅行が盛んに行われていた。たとえば、奈良女子高等師範学校では、1939 年 8 月 21 日から 9 月 7 日まで、朝鮮・満州各地をめぐる「鮮満修学旅行」を実施している（注 2）。このほか、広島高等師範学校、山口高等商業学校など、西日本を中心に大陸修学旅行の記録が各地に残されている。渡辺らは、修学旅行定番の撫順炭鉱見学コースに加え、撫順基点の歴史探訪コースを策定し盛んに新聞紙上で宣伝した。パルチザン掃討が完全に終わっていな

い地域に、軍警とともに調査隊が入り発掘や踏査を続ける。同時に観光計画を新聞紙上で報道する。当局や軍と一体となった遺跡調査に加え、観光開発まで取り込んだこの構想は、満浦鉄道開通を記念したビッグイベントとして企画されたのであろう。

渡辺らの発掘成果や観光計画が大々的に報道された 1939 年、通化省警察本部管内だけでも、日本とパルチザンの交戦回数は 631 回にのぼっている。稲葉と渡辺らがフェアラの調査を終え、ヌルハチ関連の史跡を踏査していた 10 月、パルチザン殲滅をめざす関東軍は、野副昌徳少将を赤匪討伐隊司令官に任命し、7 万 5000 の兵力と 1200 の警官隊を投入する。追い詰められたパルチザンは総司令官楊靖宇を失い、翌年にはほぼ壊滅した（李進熙『高句麗・渤海に行く』青丘文化社 1997）。

以上の通り、一連の観光開発は、鉄道網整備とパルチザン掃討作戦の進捗を受けて企画されたと推察されるが、今回の新聞記事の分析により、渡辺や窪田の活動を後押しした人物として、満州建国大学教授の稲葉岩吉の存在が浮かび上がってきた。官民一体となって進めた研究と史跡整備、観光計画の全容を知り、稲葉の関与を明らかにするため、新聞記事 152 本を手分けして、ひとつひとつ再読し分析を行った。さらに書籍や国会図書館デジタルコレクションを活用しこの計画の背景を探った。

3 新聞記事の分類と分析

152 本の新聞記事はその内容から、下記の通りにおおまかに分類することができる。

- (1) 遺跡の調査報告、研究成果の発表。
- (2) 観光開発を見こした史跡名勝の紹介。及び観光提案。
- (3) ヌルハチの伝記やサルフの戦いの解説などの歴史コラム。
- (4) 研究者や研究動向の紹介

たとえば (1) には、発掘調査の概報、踏査、遺物紹介などの成果発表が含まれる。計 49 本、全体の 32% を占める。現在の報道でもそうだが、この時代の記事にも「新発見」「新事実」の文言が躍っている。派手な見出しで、人々の注目を奪おうとしたのだろう。

発掘の成果は今日でもよく報道されているが、(2) のような記事に関しては、あまり見かけることはない。(2) は、今回扱った新聞報道の一大特徴といってよい。(2) は (1) とほぼ同数の 48 本、全体の 32% にいたる。予算や人員を確保するため、観光の効果を戦略的に広報したものと推察される。渡辺が健筆をふるった (3) の分野も計 33 本、全体の 22% に達する。平易な文章とはいえ、日本人にとってはなじみの薄い満州史のコラムだが、満州史に関する一般向け啓発を目的とした連載であろう。

4 観光計画を立案し、遂行しようとした人々

計画の立案者として特定できる人物は、以下に挙げる渡辺、窪田、稲葉の 3 名である。3 名の経歴をまとめ、当時の社会情勢を考慮しながら分析を進める。

(1) 渡辺三三(1890~1977)

岐阜県出身。県内各地で小学校教員を務めたのち撫順に渡った。教員のかたわら熱心に研究を進め、高句麗や清朝の歴史を明らかにした。撫順市図書館長就任後は、史跡整備や観光開発を推進しようとしたが敗戦とともに帰国する。戦後は、旧満州の歴史学・考古学研究には一切かかわっていない。

(2) 窪田利平(1881~?)

山口県出身。砲兵隊下士官として兵役に服したのち台湾総督府法院書記となった。中国

本土を経て満州日日新聞社に入社、在職 10 年で撫順新報社長に就任した。撫順新報は満鉄傘下の地方紙で、1927 年 4 月、窪田は満鉄 20 周年に際し記念の銀杯を授与されている。撫順体育副会長を務めたほか、碧梧桐派の俳人としても名の知られた人物であった(注 3)。

窪田は調査にたびたび同行し、遺跡での記念写真に顔をのぞかせている。三上次男の「桓仁調査行記」にも、4 泊 5 日の強行旅行であった桓仁踏査に同行したことが記されている(注 4)。当時窪田は 63 歳。並々ならぬ執念と強靱な体力を持ちあわせた人物であった。

窪田は自ら座談会を主催し、撫順市長、撫順炭鉱庶務課長、撫順駅長、撫順炭鉱庶務係主任らを招いて司会役を務めることもあった(「撫順を語る座談会 ①②」撫順新報 1940)。座談の中で窪田は、撫順周辺の史跡を積極的に開発・活用しようとの構想を紹介している。こうした座談は、1941 年にも「撫順の特殊文化を語る」というタイトルで再度試みられている(「撫順の特殊文化を語る座談会」『撫順新報』1941.6)。座談の中で、撫順の歴史や史跡に関して熱弁をふるうのはもちろん渡辺であり、渡辺に機会を用意することにより、「史都」撫順を広く喧伝しようとしたと考えられる。敗戦後の消息は不明である。

(3) 稲葉岩吉(1876~1940)

新潟県出身。東京高等商業学校附属外国語学校中国語部を卒業後北京に留学し、日露戦争時に通訳として従軍。歴史学を学ぶ前に実務家として経歴を積んだ人物である。満鉄調査部、陸軍大学校、朝鮮総督府朝鮮史編纂委員会を経て『朝鮮史』編集に従事した。この業績により京大から博士号を授与され、満州国建国大学教授に就任した。植民地統治機関で歴史研究を行いキャリアを積むという異例の道を歩んだ人物である。

国策と学問が深く関わったこの時代、帝国大学の学者と言えども、国策を批判することはほぼ不可能であった。そのような時代にあっても、実証主義に徹して政治からは遠ざかるよう心がけるなど、一線を画した研究者は少なからずいた。しかし、稲葉は、韓国併合直後より満州への関与を積極的に主張するなど、かなり前のめりな発言を続けていた。その後も歴史的事実からかけ離れた「東夷民族論」(日鮮満民族一体論)を主張するなど、学者としては異色であり、ジャーナリスティックな発言が目立つ(注 5)。

5 観光計画立案とその後の経緯

(1) 渡辺・窪田・稲葉の出会いと観光開発計画の構想

稲葉と渡辺、窪田の出会いは、清朝最古の王宮址フェアラの調査であった(注 6)。清朝の北京遷都後、フェアラはすっかり廃墟となり所在不明となっていた。その所在地は、意外な経緯で知られることになる。事の発端は、朝鮮国の武官であった申忠一の踏査録「建州紀程図記」(以下、図記と略)の所在が明らかになったことにある(注 7)。申忠一は朝鮮国より後金国に派遣された武官であり、1595 年、鴨緑江を渡りフェアラに向かった。申忠一はフェアラの見取り図を作ると同時に、フェアラにいたる道程を図化して「図記」にまとめた。稲葉は「図記」を分析し、ついにその遺跡を再発見する。建大助教授の高橋匡四郎、現地案内役の渡辺を同行し、わずかな期間であったが発掘を行い建物址 8 棟の調査も行った。1939 年 5 月のことである。

窪田はこの調査成果を大々的に報道し支援した。遺跡の保全に熱心な渡辺、財界人として地域振興を図ろうとした窪田、渡辺や窪田の構想を国策と結びつけこれを後押しした稲葉。この三者の思惑が一致した結果が撫順新報を賑わした報道だった。

(2) 満鮮史観から新東亜史観へ

渡辺の著作『撫順史話』(1938)を読めば、当時の日本で強い影響力を発揮していた満鮮史観の影響が濃厚であったことがわかる。満鮮史観とは、満州・朝鮮を密接不可分な領域ととらえ、満州が固有満州民族の領土であったことを主張し、ひいては日本による満州・朝鮮支配や満州建国の大義を正当化する歴史観である。前回の論考でもそのことに触れた。

しかし、その後、稲葉の著作を読み進めるうちに、稲葉の歴史観が満鮮史観をも凌駕するレベルに達していたことを知った。その著作とは『新東亜建設と史観』(千倉書房 1939)である(注 8)。フェアラ発掘の同年に発行されているので、発掘当時の稲葉の思想を知る上で最適な文献と言える。まえがきで稲葉自身が述べている通り、この著作は、当時進行中であった日中戦争を意識したものであり、その打開策が随所に盛り込まれている。主要部分をまとめると以下になるだろう。

- 1 朝鮮半島、満州、内蒙古への進出は日本民族の先天的使命である。華北への進出は防共のために必要不可欠である。
- 2 中国の三民主義・共和政体こそ、反日・共産主義の温床である。この政策を捨てさせるために、華北に宣統帝溥儀による帝政を施行する必要がある。
- 3 腐敗・墮落しやすい中国社会にとって、北方異民族の侵入と支配は「防腐剤」の役割を果たす。北方民族の侵入によって、中国社会は「刺激」「新鮮味」を与えられている。
- 4 今般の日本軍の進出により、蒋介石政権は長江上流に後退したが、このことが中国辺境の地の開拓につながるに違いない。これこそ事変(日中戦争)の効果である。日本行動は中国史に一大革新をもたらすに決まっている。
- 5 中国史上、最も安定した政権を作り上げたのは、満州から全中国を制覇した清朝であった。清朝の中国支配に日本も学ぶべきである。一方、中華民国は清朝の領土を受け継いだにも関わらず、清朝の偉業には何ら学んではない。

以上の言説の通り、満州国建国はもちろん、日中戦争や日本の中国支配をも正当化しようとしていることがわかる。さらに中国や中国国民を蔑視した言動も見られる。時代的制約を考慮しても、これは歴史家の仕事とは言い難いと感じた。

私たちは、従来の満鮮史観とは異なる稲葉の史観を、著作の名から新東亜史観と仮称し分析を続けることにした。では新東亜史観を渡辺や窪田は、どのように受けとめたのか。渡辺や窪田が稲葉に影響され、日中戦争を正当化しようとしているのではないかと推測し、記事を再読したところ、記事には日本の満州支配の正当性にはたびたび触れられているものの、清朝の中国支配を日本の中国侵攻になぞらえる表現は見当たらなかった。

記事を読む限り、渡辺や窪田が、稲葉の新東亜史観を受け入れた形跡はない。その理由は、稲葉の主張が、当時の国策とかけ離れていたからではなかったか。日本当局も中国本土で傀儡政権樹立を進める際には共和政体を選んだ。稲葉のいう清朝復活は漢民族の反発を招くだけで、傀儡政権のすみやかな安定を狙う日本にとっては論外の選択肢であった。渡辺や窪田も当局と異なる過激な言説の引用を避けたものと思われる。

一口に軍国主義といってもその内容は一様ではない。史料に基づき慎重に吟味する必要があることを、私たちは知った。

(3) 稲葉の死去と池内宏、和田清の登場

1940年5月、稲葉は死去した。稲葉を後ろ盾にしていた渡辺や窪田の受けた衝撃は想像するに余りある。その稲葉に代わって撫順に登場したのが、東大名誉教授の池内宏(1878

～1952)であった。池内はこの時期、集安の高句麗遺跡の調査成果を大著『通溝』にまとめ(注9)、1940年には、撫順に入り渡辺を案内役に立て北関山城の調査を開始した。撫順新報はフェアラの時と同様、連日、調査成果を書きたてた。稲葉という後ろ盾を失った渡辺と窪田にとって、池内の登場はまさに天佑と映ったにちがいない。

池内に続き、さらに帝大教授和田清(1890～1963)も撫順にあらわれた。和田は池内退官後、東大東洋史学科を主導した人物である。渡辺は和田に同行し、1941年8月には、撫順方面から吉林・開原方面の遺跡踏査に出かけ、さらに通化を経由し集安に達している。渡辺にとっては心躍る11日間であったと思われる(8.10～20)。

渡辺家にはこの踏査に旅立つ前に撮影された写真が残されていた。裏面に「昭和十六年八月十日 古城子踏査行出発前」と記されていたので、私たちはこの古城子をのちに渡辺が訪れる桓仁古城子と推定した。1944年の踏査に先立って渡辺が桓仁踏査を行ったのではないかと考えたのである(注10)。しかし実際は吉林古城子であることが記事により判明した。今回の研究の大きな成果のひとつである。渡辺の記事は、その後、時局悪化によって激減する。1944年以降の記事は見られない。池内・和田の登場により、観光計画は一縷の望みをつないだものの、戦局の悪化と敗戦によって雲散霧消したのである。

6 考察と今後の課題

今日でも、歴史研究や文化財保護への理解を求めることは生やさしいことではない。渡辺も著作の中で遺跡破壊を憤り時に当局をも批判している。渡辺らは、文化財保全の理解を広げ支援を引き出す方策として、経済効果が見込まれる観光開発を打ち出したのであろう。敗戦により計画はまぼろしと化したのが、現在、そのルートには3つの世界遺産(永陵・桓仁・集安)が所在している。戦争と植民地統治という不幸な時代のできごとではあっても、渡辺らの実績、情熱、先見性は評価されてよいと考える。

現在、3か所の文化遺産や周辺史跡は観光資源として活用されているが、文化財破壊や歴史捏造が横行している。フェアラの次にヌルハチが居城としたヘトアラは歴史テーマパークと化し、観光施設がひしめき、もはや遺跡は完全に破壊しつくされているという(注11)。集安でも高句麗の積石塚や山城の城壁が見栄えよく積みなおされるなど破壊が著しい(注12)。日本帝国の崩壊とともに消え去ったはずの観光計画は、経済発展とともに現代中国によみがえり、過剰な商業主義による文化財破壊や歴史捏造を招いているのである。

先人や隣国の動向を非難することは容易だが、現代の日本はどうだろう。改正文化財保護法が施行され、歴史遺産の観光資源化が進められるなか、過剰な商業主義により、文化財の歴史的意義や価値が損壊される可能性はないだろうか。杞憂かも知れないが、私たちは考え、話し合った。

2018年度、日本の旅行収支は2兆3139億円の黒字で過去最高となった。豪雨や地震があったにもかかわらず、訪日外国人観光客は初めて3000万人を突破し、観光収益は貿易収益(1兆1877億円)の2倍近くに達している(注13)。日本政府も全国各地の自治体も、観光収益増加を見込んで文化財の観光資源化に向かって大きく舵を切っている。

私たちは、自身の思いが杞憂に過ぎないことを願いつつ、螻蛄の斧ではあっても、先人の残した歴史遺産の素晴らしさやそこに宿る歴史的意義の大切さを、より多くの方々に伝える活動を地道に続けたいと考える。今からちょうど80年前に立案された「満州歴史ツーリズム」の教訓から学び、未来に生かすべきことは実に多い。

【研究の経緯と今回の研究】

- ・2017年12月、渡辺家より渡辺三三旧蔵資料を借り受け研究活動を開始。
- ・2018年5月、資料調査と文化財の保全・活用をテーマに、日本考古学協会高校生ポスターセッションで発表（「よみがえる渡辺三三資料 ～文化財の保全と活用に関する実践報告～」）。9月、植民地支配と歴史学研究の関わりをテーマに、全校高校生歴史フォーラムにレポート提出（「渡辺三三の撫順史研究 植民地支配と歴史学」）。11月の発表会で奈良大学長賞を受賞。9月に渡辺家より旧満州の新聞スクラップを借り受け分析を開始。
- ・2019年5月、植民地統治下の学問と国策、観光開発の関わりをテーマに、日本考古学協会高校生ポスターセッションで発表（「国策・研究・観光開発 まぼろしの満州遺跡ツアー」）。7月、特に観光開発の問題に着目した研究内容を全国高等学校総合文化祭（佐賀県）で発表。
- ・今回の研究、「撫順東方における歴史観光構想とその挫折 ～まぼろしに終わった歴史ツーリズムを読み解く～」では、新聞スクラップ全点の精読・分析と、国会図書館デジタルコレクションを含む関連書籍の調査により、歴史観光構想の詳細や当時の時代的背景に考察を加えた。満州国の鉄道網整備と観光計画の関わりや、満州建国大学教授稲葉岩吉との関与、渡辺家所蔵の写真などに関し、新たな知見を得られた。今後は、今日の日本における改正文化財保護法と文化財の観光資源化をめぐる諸問題について、研究を深めていこうと考えている。
- ・文献分析は、梅田拓海・辻龍成・岡本優奈・土田真菜が中心となって行った。石原伶緒と吉川奎騎は、陸軍参謀本部測量図、旧ソ連地図、衛星写真の情報を比較し踏査や掃討作戦のルート、当時の鉄道路線の検討を行った。研究成果は江崎晃定と片桐昂大が編集した。

【注釈・引用】

- (1) 岐阜県立関高等学校地域研究部「渡辺三三の撫順史研究」『第12回 全国高校生歴史フォーラム 2018』
- (2) 「奈良女子高等師範学校 大陸修学旅行（昭和14年）」奈良女子大学公式 web
http://www.nara-wu.ac.jp/nensi/95_96top.htm
- (3) 竹中憲一『人名辞典「満州」に渡った一万人』皓星社 2012 所収
- (4) 三上次男「東満風土雑記」『高句麗と渤海』吉川弘文館 1991
- (5) 井上直樹『帝国日本と＜満鮮史＞ 大陸政策と朝鮮・満州認識』塙書房 2013 参照
- (6) 稲葉岩吉『興京二道河子旧老城』建国大学 1938
- (7) 稲葉上掲（1938）所収
- (8) 稲葉岩吉『新東亜建設と史観』千倉書房 1939
- (9) 池内宏・梅原末治『通溝』上 1938 下 1940
- (10) 岐阜県立関高等学校地域研究部前掲 2018
- (11) 塚瀬進「明末清初におけるマンチュリア史研究の現状と課題 上」『長野大学紀要』34-2（2012）、李進熙『高句麗・渤海を行く』青丘文化社 1997 参照
- (12) 李進熙『高句麗・渤海を行く』青丘文化社 1997 参照
- (13) 「国際収支経常黒字 13%減」毎日新聞東京朝刊記事 2019.2.9

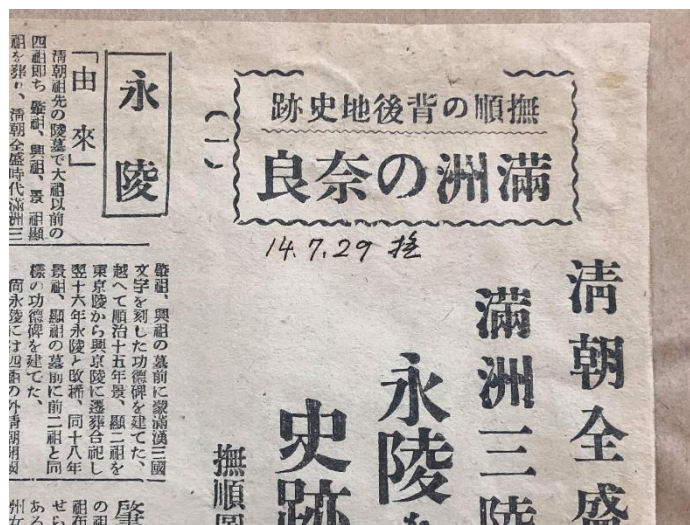
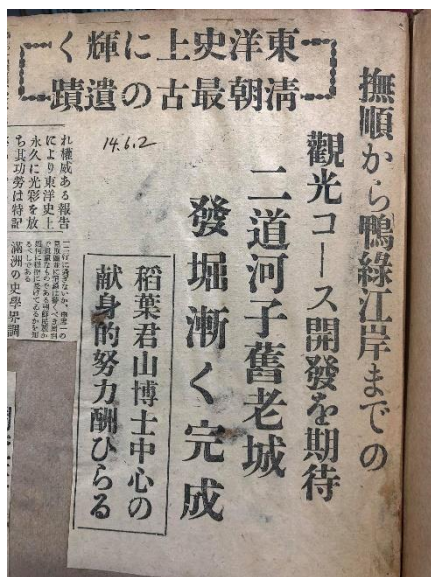
【渡辺三三・旧満州の新聞スクラップ一覧】

- (1)「撫順城の背後に接して 高句麗国の新城を発見」撫順新報 1933 (S8) 5.26
- (2)「撫順城北の路傍に 埋もれた石経幢」奉天毎日新聞 1934 (S9) 2.12
- (3)「古代撫順に開いた華麗な仏教文化」満州日報 1934 (S9) 2.16
- (4)「惜しまれて栄転する撫順郷土史研究貢献者渡辺三三氏」撫順新報 1936 (S11) 3.31
- (5)(6)**「鉄背山城発見 界藩城占領行 上・下」撫順新報 1938 (S13) 11.21～22
- (7)「第三玄菟郡城は瀋陽県劉二屯か」奉天毎日新聞 1939 (S14) 4.24
- (8)～(15)**「清朝発祥の地 二道河旧老城発見 稲葉博士に随いて一～八」撫順新報 1939 (S14) 4.16～23
- (16)「稲葉博士一行 13日再び興京へ」撫順新報 1939 (S14) 5.12
- (17)「旧老城発掘ようやく完成」撫順新報 1939 (S14) 6.2
- (18)「興京の太祖居城址発掘 調査報告座談会」撫順新報 1939 (S14) 6.4
- (19)「清朝最古の遺跡旧老城調査画報」撫順新報 1939 (S14) 6.4
- (20)「さらに大石築城 旧老城調査を完成」満州日報 1939 (S14) 6.4
- (21)「旧老城の全貌明確となり史上光彩を放つ」大阪毎日満州版 1939 (S14) 6.4
- (22)～(28)「清朝最古の古跡旧老城調査画報 一～七」撫順新報 1939 (S14) 6.5～10
- (29)「新に発見された木底城城壁の跡」大阪毎日満州版 1939 (S14) 6.7
- (30)「薩爾許寶碑重修理を 宮内府顧問官寶熙氏五日視察」撫順新報 1939 (S14) 6.7
- (31)(32)**「清太祖最後の療地 温泉寺を訪ふて 上・下」撫順新報 1939 (S14) 7.5～6
- (33)～(38)**「撫順背後地史跡 満州の奈良 一～六」(永陵史跡踏査)撫順新報 1939 (S14) 7.29～8.4
- (39)**「撫順地方の史蹟」撫順新報 1939 (S14) 9.17
- (40)～(47)**「撫順の古代瓦 一～八」撫順新報渡辺三三・斎藤武一 1939 (S14) 9.21～29
- (48)「撫順の佟家古墳発見 稲葉博士一行視察」撫順新報 1939 (S14) 10.18
- (49)「界凡城(鉄背山城)の踏査 稲葉博士一行調査二日目」撫順新報 1939 (S14) 10.21
- (50)～(60)**「大撫順市の背景 著名史跡・景勝画報 一」撫順新報 1939 (S14) 12.7～17
- 遼東辺牆 鉄背山城 五嶺 古勒山城 永陵 煙筒山 瓦爾喀什 富察の古戦場 五女山 高句麗 県城 佟氏
- (61)～(64)**「史蹟撫順を語る 文学博士池内宏氏講演概要 一～四」撫順新報 1940 (S15) 5.11～14
- (65)～(72)**「撫順基点観光ルート 永陵を語る 一～八」撫順新報 1940 (S15) 5.15～22
- (73)「撫順基点観光ルート 満州義軍」(飯田信一)撫順新報 1940 (S15) 5.15
- (74)(75)**「稲葉岩吉訃報」満州日報 1940 (S15) 5.25～26
- (76)～(79)**「稲葉岩吉訃報 一～四」撫順新報 1940 (S15) 5.26～29
- (80)「清初六祖城址発見 建大助教授 撫順図書館長一行」撫順新報 1940 (S15) 7.1
- (81)「清初六祖の古城 建大踏査隊が発見」満州日報 1940 (S15) 7.2
- (82)「清初六祖城址発見 興京調査隊に凱歌」毎日?(奉天もしくは大阪) 1940 (S15) 7.2
- (83)**「清初六祖発見写真報 一 寛爾察城址」撫順新報 1940 (S15) 7.27
- (84)**「清初六祖発見写真報 二 阿哈伙洛 伙洛噶善 赫図阿拉 尼瑪蘭」撫順新報 1940 (S15) 7.27

- (85)「清初六祖発見写真報 三」撫順新報 1940 (S15) 7.29
- (86)「漢代第二玄菟郡治址の発掘」撫順新報 1940 (S15) 7.30
- (87)「遺跡を護れの叫び 破損著しき集安 撫順でも調査」満州日報 1940 (S15) 8.13
- (88)「音頭小唄の入選作」撫順新報 1940 (S15) 9.11
- (89)「考古学の権威が撫順城の史的調査」満州日報 1940 (S15) 9.11
- (90)「池内博士の撫順史蹟調査」撫順新報 1940 (S15) 10.2
- (91)「本年は先ず山城に集注 来撫した池内博士談」撫順新報 1940 (S15) 10.3
- (92)「立派に石塁だ 河石も積んでいると池内博士山城踏査」撫順新報 1940 (S15) 10.4
- (93)「撫順山城調査隊に凱歌」撫順新報 1940 (S15) 10.5
- (94)「撫順史蹟調査隊が早くも二大発見」撫順新報 1940 (S15) 10.7
- (95)「高句麗城から石炭 塔の跡から鴟尾・瓦当」撫順新報 1940 (S15) 10.8
- (96)「東門は永久保存 他は後で埋める」撫順新報 1940 (S15) 10.9
- (97)「城の形が判った 高句麗新城は断じて間違いない」撫順新報 1940 (S15) 10.11
- (98)「高句麗新城東門から銅の埴塼が出て来た」撫順新報 1940 (S15) 10.15
- (99)「深井子の北方に漢代土城発見 遼の貴徳州址発見」撫順新報 1940 (S15) 10.17
- (100)「撫順今期史跡調査終わる」撫順新報 1940 (S15) 10.17
- (101)～(103)「撫順県史と新屯神社を想う 上・中・下」撫順新報 1940 (S15) 11.10～14
- (104)「撫順を経営した民族について」撫順新報 1940 (S15) 11.10
- (105)(106)「撫順を語る座談会 ①②」撫順新報 1940 (S15) ?
- (107)(108)「興京夜話 上・下」東京朝日新聞 1940 (S15) 12.19
- (119)(110)「撫順で創業した満州で最初の砂鉄精錬回顧 上・下」撫順新報 1941 (S16) 1.14～15
- (111) ? 増訂 撫順史話
- (112)「馬郡丹戦蹟碑 建設工事の思出」撫順新報 1941 (S16) 3.10
- (113)「陸軍記念日所感」撫順新報 1941 (S16) 1.14
- (114)「戦国時代の明刀銭が策一ぱいザクザク」撫順新報 1941 (S16) 8.9
- (115)「東大教授和田博士の満州古城調査成功」撫順新報 1941 (S16) ?
- (116)「撫順の特殊文化を語る座談会」撫順新報 1941 (S16) ?
- (117)～(120)「東大教授和田清博士 女真城址行脚 一～四」撫順新報 1941 (S16) 9.4～?
- (121)「高句麗城址で鳴鏑を発見す」大阪毎日新聞 満州版 1941 (S16) 11.7
- (122)「薩爾滸戦に於ける尚間崖古戦場踏査」撫順新報 1941 (S16) 10月?
- (123)～(129)「撫順郷土史を語る 一～七」撫順新報 1941 (S16) 11.21～27
- (130)「撫順商店連合会の鍊成ハイキング決行」撫順新報 1941 (S16) 8.16
- (131)「撫順郷土博物館設立に識者の応援奉仕を慫う」撫順新報 1942 (S17) 2.27
- (132)～(146)「薩爾滸戦史 一～十五」満州日報 1942 (S17) 5.12～29
- (147)～(150)「清太祖の城 一～四」満州日報 1942 (S17) 5.30～6.4
- (151)(152)「石棚を発見 撫順図書館長渡辺三三氏が発見上・下」満州日報 1942 (S17) 12.5～6

152 本中、署名記事 84 本、撫順新報記事 108 本、太ゴシックは連載記事

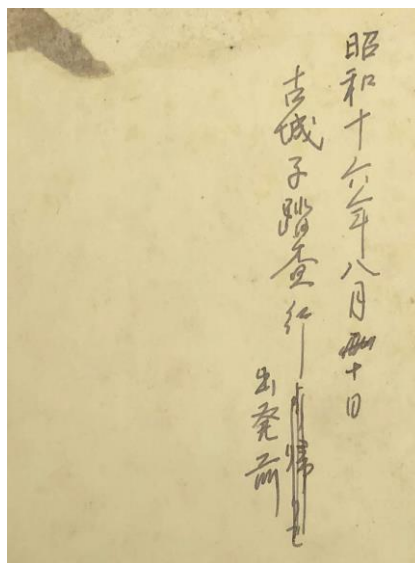
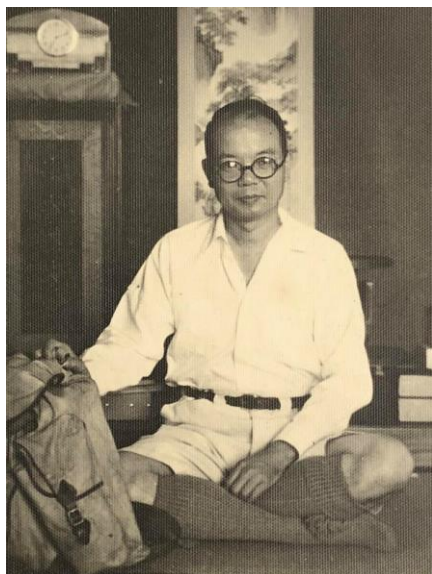
【写真図版】



撫順新報掲載の歴史ツーリズム構想と満浦鉄橋開通 左写真の記事（撫順新報 1939.6.2）には「撫順から鴨緑江岸までの観光コース開発を期待」とある。1936年2月、梅河口と集安を結ぶ鉄道工事が開始され1938年5月には全線開通。さらに1939年10月、鴨緑江を渡る満浦橋梁が完成、鮮鉄満浦線との接続により朝鮮と満州国が結ばれることとなった。新聞記事は同年7月のことであり、満州国側・朝鮮側の双方から観光客を誘致する計画を立てたものと想像される。右写真は「撫順背後地史跡 満洲の奈良 一」（永陵史跡踏査）（撫順新報 1939.7.29）の記事。清朝勃興の地を「満洲の奈良（古都）」と位置付けてのアピールである。



撫順新報記事と渡辺家所蔵写真 左写真は記事は「大撫順市の背景 著名史跡・景勝画報 四」（撫順新報 1939.12.11）。使用写真は渡辺家にも保管されていた。写真は鉄背村から蘇子河を渡った吉林崖。窪田、渡辺、稲葉、高橋の面々が写る（1939.10.15撮影）。



吉林・開原から集安へ 渡辺は和田清に同行し、撫順方面から奉吉線で吉林・開原方面の遺跡踏査に出かけ、さらに通化を經由し梅集線で集安に達した（1941.8.10～20）。渡辺家には踏査出発前の写真が保管されていた。この踏査は、パルチザン掃討と梅集線全線開通によって可能となった。この一枚の写真の背後にも、様々な史実が交錯する。



資料公開と公開講座 昨年度、貴重な資料の一般公開のための特別展示を、岐阜県博物館（左写真）及び図書館で行った。さらに岐阜県博物館では、本校生徒と寺内威太郎氏（明治大学教授・清朝史）による公開講座を行った（2018年9月29日）。『2018 関高 SGH 情報 37』を参照。 https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf/h30_sghjoho_37.pdf

東洋史家渡辺三三の業績とその生涯

高等学校 地域研究部

はじめに

2017年12月から2018年にかけて、岐阜県立関高等学校地域研究部（以下、地研部と略）は、岐阜県輪之内町出身の歴史家、渡辺三三（わたなべさんぞう、1890～1977）の旧蔵資料の調査を行った。

渡辺は、終戦まで旧満州撫順を中心に活動し、高句麗や女真の研究に功績を遺した人物である。昨年、親族にあたる渡辺充氏が、自宅に保管されていた資料の一部を、岐阜県博物館（以下、県博と略）に寄託した。かねてから県博と連携していた地研部は、渡辺家と協議を重ねながら資料の研究を行うことに決定した。研究計画は以下の通りである。

④ 旧蔵資料は関高校が一時的に預かり、地研部員が調査を行う。

⑤ 旧蔵資料の保管・活用に関しては、県博・関高校・渡辺家の三者で話し合う。

⑥ 研究成果を積極的に発表する。同時に、県博で企画展を開催する。

まず①に関しては、地研部員が渡辺家を訪問し、写真や書籍を一時預かることにした。次に②に関しては、資料の重要性を考慮し、専門研究者が常駐する九州大学総合研究博物館への寄贈を決定した。さらに中国・韓国の研究機関に、データを送ることを協議している。③に関しては、2018年度日本考古学協会総会高校生ポスターセッションや、同年度全国高等学校歴史学フォーラム（九州国立博物館主催）での発表を行った。

また、普及活動として、県博（2018年9月11日～10月21日）、岐阜県図書館（同年11月13日～25日）で、それぞれ企画展を計画した。県博では9月29日に、公開講座（地研部の発表、寺内威太郎明治大学教授の講演）も実施した。

私たちの研究は、遺物実測や写真・文献の精査から始まった。学会での発表内容も貴重な資料の再評価や保全・活用が中心であった。しかし、次第に研究を深める中で、渡辺が活動した時代的背景にまで踏み込んで研究を行うようになった。研究成果のうち、近代日本の植民地統治と学問研究の関わりをまとめた論考「渡辺三三と撫順史研究 植民地支配と歴史学」は、2018年度全国高校生歴史フォーラム（奈良大学・奈良県主催）において、優秀賞を受賞した。

本稿では、東洋史家としての渡辺三三の生涯を振り返るとともに、研究活動の一端を紹介したい。

一 渡満から満州事変までの動向 1923～1931

1890（明治23）年、安八郡輪之内町に生まれた渡辺は、岐阜師範学校を卒業し、県内各地の小学校で教鞭をとった。1923（大正11）年、33歳になった渡辺は、旧満州に渡り、撫順の永安小学校、東七条小学校で教壇に立つ。

なにゆえ旧満州に日本人学校が存在したのかといえば、話は1905（明治38）年のポーツマス講和条約締結にまでさかのぼる。この条約で日本は、関東州の租借権、東清鉄道（長春～旅順）の経営権をロシアより譲渡された。これにより鉄道付属地の撫順は炭鉱の街として栄え、結果、多くの日本人が移住した。初等教育の拡充は、日本人居留民の激増に伴って必要とされたのであり、各地に建設された小学校の教員不足を補うため、内地の教員が募集・動員に応じ渡満した。渡辺もこうした教員のひとりであった。

渡辺の研究活動は満州事変（1931）以後、活発化する。事変以前、果たして渡辺がどの程度の研究をおこなっていたのか判然としなかったが、今回、その当時の活動を物語る資料が発見された。

ラベルを付した遺物がそれであり、その一部から、採集日や採集場所を知ることができた。このうち、石包丁と環状石斧の計 2 点に記されていた「望海窩」（望海塢）とは、戦前から日本人によく知られていた新石器時代の遺跡のことで、日本の直轄領だった関東州金州区に所在する。

二 満州事変から敗戦までの動向 1931～1945

1931（昭和 6）年 9 月に始まった満州事変により、日本軍の勢力は一気に旧満州全土におよんだ。結果、1932（昭和 7）年、満州国が建国されることになり、渡辺の活動範囲も広がることとなった。

1933（昭和 8）年 5 月 5 日、撫順郊外の高爾山遠足中に古代の土塁を発見、これが北関山城の発見につながった。文献精査と現地踏査を経て、渡辺はこの山城を、史書や碑文にあらわれる高句麗の「新城」に比定した。三三五年、撫順の玄菟郡治（永安公園土城）を征服した高句麗は、渾河対岸北方の山塊に山城を築き「新城」と命名した（『三国史記』高句麗本紀故国原王 5 年）。踏査成果は早くも同年に論文発表されている。この論文の抜刷は渡辺家に保管されていた。

1935（昭和 10）年 十一月、満州国皇帝溥儀の招きによって、かつて家庭教師だった英国人レジナルド・ジョンストンが訪満。外交官であり東洋学者であったジョンストンは、清朝初期の史跡探訪を希望、当局は現地の事情に通じた渡辺に案内役を依頼する。当時、渡辺氏は奉天の敷島小学校の教員。国賓の案内人としては異例かもしれないが、すでにこの時期の渡辺は、現地における第一人者であったということであろう。

ジョンストンは 11 月 8・9 日、清朝初期の史跡を見学。兵士に警護されたトラック一台が先駆してバスを警護している。渡辺はこの小旅行を「興京二夜」という一文にまとめ、雑誌『満蒙』2 月号に寄稿した。『満蒙』には、渡辺・ジョンストン・程明超の 3 人の記念写真が掲載されている。この写真の実物は渡辺家に保管されていた。許可を得てアルバムから剥がすと、裏面に、ジョンストンと渡辺のサインが残されていた。

1938（昭和 13）年 長年に渡る撫順史研究の成果を『撫順史話』にまとめ上梓した。さらに渡辺はこの年、黒竜江省の綏化小学校校長から撫順図書館長に就任する。一教師から、満州国の文教政策の一角を担う重職に転身したのである。

この時期、前年に始まった日中戦争の影響で、旧満州の日本軍とパルチザンの抗争も激しくなり、軍の出動範囲も拡大した。図書館長就任と戦火の拡大により、軍に守られた渡辺のフィールドは、念願の撫順東方の山岳地帯へと広がることとなった。

1939（昭和 14）年 1936（昭和 11）年、永安公園内誉丘から漢代遺物が出土（千秋萬歳銘瓦等）し、この地が漢代土城であり、史書にいう玄菟郡治（第三次）と推測されるにいたる。のちに渡辺は斎藤武一とともに、この土城や北関山城出土の瓦に就いての論考をまとめ報告している。このほか、渡辺家には銅鏃四点が保管されていた。銅鏃の形態から、誉丘出土遺物と判断できる。

渡辺家にはこの年に撮影された蘇子河畔での写真が保管されていた。渡辺たちの背後には警官隊が控えている。当局によりパルチザン掃討が進められていたとはいえ、踏査には

警護が必要だった。当局の全面支援を受けた研究体制であったことを象徴する写真である。

1940（昭和 15）年 9 月 撫順東方の鉄背山城踏査の記念写真が残されている。鉄背山城は、ヌルハチが興京防衛のために築かせた要塞であった。清朝史の権威、和田清東京帝国大学教授に同行した調査であり、1940（昭和 15）年 9 月 25 日の日付がある。

1940（昭和 15）年 10 月 2 日～15 日 渡辺は池内宏や三上次男とともに北関山城の発掘調査に参加。高句麗山城に関する初の発掘調査である。渡辺家にはこの時の写真が保管されていた。裏面に 1940（昭和 15）年 10 月 15 日の日付が残る（発掘終了日）。池内宏、渡辺とともに、戦後の東北考古学を主導した李文信の姿も見える。

1941（昭和 16）年 床の間を背にリュックを携えた姿で撮影された写真が残る（8 月 10 日の日付）。「古城子踏査」との記載があり、ここにいう「古城子」を、我々は高句麗前期の都が置かれた桓仁の地名と考えたが、文献精査の結果、北方の吉林に所在する女真の遺跡名であることが判明した。渡辺や和田清は、10 日に渡る踏査を終えると、その足で集安にまで向う。鴨緑江岸の集安は、好太王碑で知られる高句麗中期の都。渡辺たちの脳裏には、撫順から集安を抜けて満浦鎮にいたる観光ルート開発があった（この件に関しては、稿を改めて論じたい）。

1944（昭和 19）年 敗色濃厚になった一九四四年も、渡辺は精力的に研究を続けていた。北関山城 2 次調査（5 月 19～27 日）、陳相屯塔山の高句麗山城踏査（5 月 28 日）、桓仁方面の遺跡踏査（6 月 1～5 日）と、矢継ぎ早に調査が行われている。

敗戦と帰国 1945（昭和 20）年 8 月の敗戦にともない、渡辺もそれまでの地位を失った。1947（昭和 20）年に帰国し、故郷の安八郡輪之内町に帰った。戦後は旧満州の歴史研究からは離れ、輪之内町の町史編纂事業等に携わった。1977（昭和 52）年死去。

まとめ

以上、渡辺の生涯を振り返りつつ、多年にわたる研究成果を通覧した。徹底したフィールドワークと文献精査により、漢の進出や高句麗の勃興、初期清朝の歴史を実証的に明らかにした功績は大である。その一方で、一連の研究が、日本の植民地統治と深く関わったことも明記されなければならない。

稲葉岩吉、和田清、池内宏といった多くの日本人研究者が、渡辺に導かれて本格調査に乗り出したように、私たち地研部も、渡辺の研究の跡を追うことにより、東アジアの歴史や文化財、さらには近代日本とアジアの関わりについて考えるようになった。

私たち地研部は、最近、渡辺家で発見された新資料を軸に、今後も研究を続ける予定である。



【参考文献】

渡辺三三『撫順史話』撫順新報社一九三八

三上次男『高句麗と渤海』吉川弘文館一九九〇

神田信夫・三上次男『東北アジアの民族と歴史』山川出版社一九八九

満州の抗日武装組織とその掃討作戦

関高等学校 地域研究部

江崎 晃定（高校 72 回生）

目 次	29
はじめに	30
（一）満州事変以前の状況	30
（二）満州事変直後の状況	31
（三）満州国成立時の状況	32
（四）日中戦争以降の状況	34
考察と今後の課題	35

はじめに

終戦から 75 年を迎え戦争の記憶が薄れていく中で、中国で抗日運動を行った抗日武装組織とその掃討作戦を行った満州国警察の活動を検討していきたい。

本稿は地域研究部（以下、地研部と略）で 2 年間行ってきた渡辺三三の研究から分野を絞ったものである。まず、これまでの研究内容を簡単に述べていきたい。1 年目は渡辺が満州から日本へ持ち帰った遺物の実測やトレース、論文の読み解きを行った。その結果渡辺の踏査が武装組織から身を守るため、軍警を伴ったものであったことが分かった。2 年目の研究では、新たに発見された渡辺の新聞記事のスクラップを読み解いた。その結果、渡辺の研究とパルチザン掃討作戦、観光開発計画が密接に関係していたことが判明した。

これらの研究を行う中で、「匪賊掃討と渡辺の踏査時期は本当に一致するのか」という疑問が生まれた。そこで武装組織の活動範囲とその掃討について、詳細な検討を行うことにした。本稿は本格的な研究というより、関連する資料を簡潔にまとめた面が強い。

以下、時系列に沿って、匪賊と呼ばれた抗日武装組織の変遷を追っていくこととするが、一口に匪賊といってもその内容は多様である。また特徴も異なるため、略奪行為を主とする野盗・群盗の類を「土匪」、敗残兵や旧軍閥兵士を「兵匪」、旧張学良軍を「政治匪」、中国共産党指導下の東北人民革命軍（のちの抗日連軍）を「共匪」と定義する。

（一）満州事変以前の状況

満州事変事前の抗日武装組織は盗賊的な性格が強く、その数も辛亥革命以降年々増加している。澁谷由里氏による『馬賊で見る「満州」』に基づいて、抗日武装組織の構成・活動について記していきたい。

（一）匪賊団は 1400 以上存在し、総数は 7 万前後であり、集団構造・指揮系統は厳密である。集団内の集結力が強いだけでなく、常に各集団が合同で掠奪するので有名な大匪賊の頭目と強大な集団が現れた。例えば、四平街東部の全勝は 600 人以上、昌図県西部の老三省は 2000 人と称し、通遼県西部の天下好は 2600 人、遼中県の老北風は 1400 人、法庫県の東天楽は 1300 人、営口県北部の三勝は 2000 人と称するなどであった。ただし、ほとんどの集団は 100 人前後であった。

（二）匪賊のメンバーのうち博徒、アヘン中毒者、脱走兵、賊民、やくざ・無頼の徒、犯罪者などの命知らずが主力として活動し、強奪、人さらい、寄付の強要などが主要な活動であった。

満州事変以前の満州の抗日武装組織は略奪行為やアヘン製造などの非合法行為を行う集団であると同時に、中国人地主に雇われる警備団として存在していた。活動範囲は間島地域に比較的広範囲に分布していた。この時期の抗日武装組織は、抗日活動を主とするものは少なく、盗賊団のような性格を持つものが多い。しかし、間島地方において抗日活動がなかったわけではなく、朝鮮人の独立運動家が抗日活動の拠点としていた。のちに朝鮮民主主義人民共和国を建国する金日成も間島地方で抗日活動を開始している。

さらに民国 13 年（1924 年）から民国 20 年（1931 年）までの抗日武装組織数は次の通りである。

民国 13 年	（1924 年）	20000 人	（奉吉黒三省）
民国 14 年	（1925 年）	20000 人	（奉吉黒三省）
民国 15 年	（1926 年）	28000 人	（奉吉黒三省）
民国 16 年	（1927 年）	50000 人	（熱河省を含む）
民国 17 年	（1928 年）	50000 人	（熱河省を含む）
民国 18 年	（1929 年）	58000 人	（熱河省を含む）
民国 19 年	（1930 年）	47000 人	（熱河省を含む）
民国 20 年	（1931 年）	60000 人	（内奉天省 30000 人、吉林省 10000 人、熱河省 14000 人、黒竜江省 6000 人）

上記の抗日武装組織の増加から、この当時の世情は不安定であり、治安も決してよいとは言えない状況にあったことが推測できる。これらの抗日武装組織は辛亥革命以後に勢力を拡大させ、大集団を構成していた。

（二）満州事変直後の状況

満州事変後、日本軍は鉄道附属地の在留日本人の保護を理由に中国軍隊・公安隊の武装解除を行った。その結果、当時東北四省にあった 22 万の軍隊と 11 万の警察は所属地を失い、その多くが抗日武装組織へと流入していった。中でも満州事変以前から増加していた職業集団は満州事変の混乱期にその勢力を増加させ、人員・装備ともに強大になっていった。その集団の主なものは次の通りである。

民国 20 年	（1931 年）
金勝	600 人（四平街東方）
紅楽	1400 人（鄭家屯南方）
老三省	2000 人（昌図西方）
東天楽	1300 人（法庫県内）
天下好	2600 人（通遼四方）
老北図	2000 人（遼中）
三勝	2000 人（営口北方）
青山	600 人（磐山）
天徳	600 人（海城東方）

上記の表から、「政治匪」の活動範囲が満鉄沿線に分布していることがわかる。特に大連—新京間の沿線に集中傾向がみられる。調査範囲が限られていた可能性もあるが、満鉄沿線の治安状況が悪化していたものと考えられる。さらに、上記のリスト以外に、懷徳、梨

樹、昌図、遼源、康平、伊通、西安、開原、鉄嶺、清原、遼陽、遼中、台安、海城、蓋平各県には数百名を一団とする多数の「土匪」が存在していたという。

満州事変後は中国全体として、反日運動が高まり、特に東北地方では「政治匪」や「土匪」によって抗日義勇軍が相次いで組織された。一方、1930年10月、中国共産党の指導によって、廖如願（中国人）を書記、王耿を組織部長とする東満特別委員会が成立した。満州事変に対して中国共産党中央はただちに反応し、9月20日に「日本帝国主義侵略行動反対宣言」、続いて「日本帝国主義独占満州事変決議」を発表した。東満州特別委員会は31年秋期の秋収暴動と32年の春荒暴動を組織した。これらの暴動は反地主闘争と、「打倒日本帝国主義」の政治要求とを結びつけた反日・反地主闘争であった。

満州事変後は本格的に抗日運動が開始された時期であった。この時期の抗日活動の中心は旧張学良系の「政治匪」であり、軍警の多くを取り込み各地で抗日武装組織を形成していった。共産党系の「共匪」の抗日活動は「政治匪」と比べると少ないが、反日と反地主を同時に行うことで、下層農民からの支持を次第に集めるようになっていた。

（三）満州国成立期の状況

（1）討伐側

1932年3月1日に愛新覚羅溥儀を執政とする満州国が成立した。満州国成立期の最大の課題は、抗日勢力を掃討し治安の確立を図ることであった。関東軍は「大匪賊」を標的とした大規模な作戦的掃討を敢行した。満州国側治安当局は大同元（1932）年10月3日、中央及び省に清郷委員会を設置させ、警察側も「警察討伐隊」という武装集団を組織し、東部線、西部線、熱河省及びに華北に大作戦を展開した。これらの状況を地区別にみていくと次の通りである。

奉天省

大同元（1932）年4月、国際連盟のリットン調査団一行が入満する頃から「政治匪」の活動が活発になり、唐聚伍が東北人民救国軍を組織し、李春潤、徐遠元、孫秀岩等の軍警も参加し、通化、臨江、集安、桓仁、柳河、金川、興京等の各県を勢力下におき、自ら政治を行い、独立国の体をなしていた。遼河地区には老北閣、三勝、遼印清、斐東閣、安図地区には、鄧鉄梅、李子栄、逃遼地区には張海川、高蔭周、遼西地区には、鄭桂林、朱愛蘭、耿継周らが活動し、その数14万余りであった。

当時、日本軍の活動の重心は北満に向けられていたため、南満に関して奉天省においては満鉄沿線各県城を保持するのが精いっぱいであり、その他の多くは匪賊に占拠されており、治安状況は非常に悪い状況であった。

このような状況から日本軍は秋季に大規模な掃討作戦を敢行した。まず9月10日、唐聚伍一派を目標として東辺道大討伐が敢行され、通化を占拠し東北義勇軍を壊滅させた。その後も12月14日から安奉線と満鉄本線に囲まれた三角地帯の討伐を開始し、翌年1月には、遼河地区の討伐を行い、省下全県城の治安を回復した。

吉林省

吉林省内における旧軍閥勢力の残党将兵や地方「土匪」は、救国軍を名乗り省内各地に拠って存在していたが、満州国成立後は反満を叫んで保衛団や自衛団などに働きかけ、李海青は大同元（1932）年 3 月 18 日に扶余城を占拠し、同月 27 日に農安城を襲撃するなど大同元年夏季における匪賊への参加者は十数万に達し、その襲撃に落とされた県は 18 に及んだ。特に東北地区各県の軍警の討伐は思ったように進展せず、ほとんど放任状態であった。

大同元年の年末には吉長線一帯の討伐を実施した。大同 2 年 1 月には、東北方面の大討伐、さらに 3 月 4 日、日本軍天野部隊が海林を、さらに同月 6 日には寧古塔を掃討した。この結果、李杜、王徳林はソ連領内に亡命した。こうして、吉林省内の 12 県は吉林省の掌握下に入った。

黒竜江省

黒竜江省においては張学良の将軍であった馬占山が省城を追われてからもなお黒河にあり、哈爾濱奪回を企てて、その配下は呼海線に拠って 6 月 2 日には哈爾濱対岸の松浦区に侵攻した。また呼倫貝爾に反乱を起こした蘇炳文に対しては、黒竜江省軍衛隊団、騎兵第三衛第一支隊及び興安省南警備軍の一部四千名が、日本側の東支鉄道西部沿線作戦部隊に協力し、蘇炳文側の約二万名の軍を迫撃、11 月年末には一挙に興安嶺を超えてこれと対決し、蘇炳文はソ連に敗走し、大作戦は終了した。こうして黒竜江省も治安の回復を果たした。

満州国警察の抗日武装組織出現回数と討伐隊の出動回数をみると、各省内全体的に抗日武装組織の出現が多くその分討伐隊も多く出動していた。

掃討作戦において、満州国成立直後から抗日武装組織を掃討する際に犯罪捜査や検挙、取り調べ、調書の作成、送検などの業務段階を踏むことなく作戦をおこない、状況によってはその場の高級警察官の判断によって即座に相手を殺害することが可能になるいわゆる「暫時懲治盗匪法」が公布されていた。「暫時懲治盗匪法」（大同元年 9 月 7 日教令第一八号）には、以下の条項が記載されている。

第 7 条 軍隊、部隊をなす盗匪の勦討肅清するにあたり、その臨陣各殺しうるのほか、該軍隊の司令、その裁量によりこれを措置することを得。

第 8 条 高級警察官の指揮する警察隊、部隊をなす盗匪を勦討するにあたり、その臨陣各殺しうるのほか現場において盗匪を逮捕し、事態急迫にして猶余を許さざる事情あるときは、該高級警察官、その裁量によりこれを措置することを得。

この法律によって満州における抗日武装組織掃討は行われていたのである。また、この当時の満州国警察の装備は拳銃・小銃・軽機関銃・迫撃砲・擲弾筒・手榴弾であり、さながら軍隊の相様を呈していた。また満州国警察の多くは中国人であった。これは日本が満州国を独立国としてアピールするためのものであったと考えられる。

（2）匪賊側

1931 年から 1933 年ごろの主な抗日義勇軍はつぎのとおりである。

（１）黒竜江省

◎東北民衆救国軍 指導者：蘇炳文 海拉爾で決起、32年10月～12月満州里、富拉爾基一帯で活動した。

◎黒竜江省守備軍 指導者：馬占山 1931年11月4日～19日、「嫩江橋抗戦」を戦う。昂昂溪、で活動した。

◎黒竜江省抗日救国軍 指導者：馬占山 1932年4月、海倫で活躍。大刀会・紅槍会等を加えて編成した。

（１）吉林省

◎吉林自衛軍（反吉林軍） 指導者：李杜・丁超 1932年1月～2月、哈爾浜付近で活動した。

◎中国国民救国軍 指導者：王徳林 1932年2月～33年1月、敦化県、寧安、綏芬河、穆稜一帯で活動した。

（２）遼寧省

◎遼寧民衆自衛軍 指導者：唐聚伍 1932年～33年はじめ、遼寧省東部の東辺道一帯で活動し、大刀会も参加した。

◎東北国民救国軍 指導者：高鵬振（緑林出身） 主たる活動時期：1931年9月

◎東北抗日義勇軍第三縦隊 指導者：張海濤 主たる活動期間：1931年9月

◎遼西抗日救国義勇軍 指導者：王顕庭 主たる活動期間：1931年11月 東北民衆救国軍により東北民衆自衛義勇軍第一路軍

◎蒙辺威鎮第一義勇軍 上記に同じく東北自衛義勇軍第二十五路軍に編成された

◎遼北義勇軍 救国会により救国軍第五軍区となる。 指導者：高文彬 1932年5月～33年12月熱河地域で活動した。

満州国成立後は、「政治匪」が各地で抗日活動を活発に行っていた。馬占山や李杜、丁超らは都市部で活動をおこない、王徳林や唐聚伍、蘇炳文、高文彬らは国境地帯を中心に活動を行っていた。しかし、日本側による掃討作戦により大規模な抗日武装組織は次第に減少し、新たに小規模の抗日武装組織が作られるようになった。このような抗日武装組織は普段は警備が手薄な場所に拠点をもち、互いに連絡して時には集団となって活動をおこなっていた。

満州国成立期に抗日運動の中心であった「政治匪」は、匪賊掃討によって規模を縮小したが、小規模な抗日武装組織に再編成されることによって以前よりも活動範囲が広がった。それにより抗日武装組織の掃討がさらに難しくなった。

（四）日中戦争以降の状況

1937年7月7日の盧溝橋事件勃発により日中戦争が始まった。

先にも述べたが、その当時の満州では、関東軍と満州国警察による抗日武装組織掃討作戦によって大規模な抗日武装組織は減少し、代わりに小規模の抗日武装組織が広く点在するようになった。抗日義勇軍もその例外ではなく、その多くが壊滅するなか、共産党系の「共匪」へと合流していった。

1936 年のコミンテルン駐在中共代表団が発表した中共中央名義の「全東北抗日連軍総司令部を設立するための決議草案」によって、2 月 20 日に東北人民革命軍第一軍から第六軍までの軍長楊靖宇・王德泰・趙尚志・李延禄・周保中・謝文東および湯原遊撃隊・海倫遊撃隊の名義で、「東北抗日連軍の軍隊編制を統一するための宣言」を発表し、東北人民革命軍第一・二・三・六軍と抗日同盟軍第四軍、反日連合軍第五軍および、各反日遊撃隊を「一律的に東北抗日連軍第一・二・三・四・五・六軍および抗日連軍遊撃隊に改編する」ことを声明した。

この改編により、今まであくまでも革命優先としていた東北人民革命軍から抗日を優先する東北抗日連軍に変えることで、様々な反日武装集団を組織に取り込むことに成功した。コミンテルン指導下の人民戦線結成や中国における第二次国共合作に呼応した動きであり、共産党の色合いを薄めることにより大連合結成をめざしたが、最大勢力であった大刀会や朝鮮革命軍が合流しなかったため大勢力にはなり得なかった。

各地の抗日組織は山間部にゲリラ的に潜伏し、山間部の民家から食べ物や武器の補給を受けていた。これに対して満州国政府は、山間部の民家や住民と抗日部隊を分離するために、山間部の民家を焼き払い、住民を治安維持上有利な地点に強制移住させる集団部落政策を行った。

この政策により抗日部隊は食糧や武器の補給ができなくなり次第に勢力をうしなっていた。東北抗日連軍の総司令であった楊靖宇も 1940 年 2 月 23 日に掃討隊によって射殺され、残存する組織もソ連領へと亡命し、東北抗日連軍の組織的抵抗は終了した。

考察と今後の課題

満州事変以前の抗日武装組織は間島地方に広く存在しており、その特徴も盗賊的な性格が強い。満州事変以後は「政治匪」の存在が大きく、各地で抗日武装組織を設立し、抗日活動が盛んになる時期であった。その活動の中心は満鉄沿線であり、その地域の治安状況は非常に悪かったことが分かった。満州国成立後も都市部・山間部関係なく続けられていた抗日運動は、掃討作戦によって規模が縮小したものの、抗日運動は依然として盛んであった。日中戦争期には「共匪」が抗日運動の中心となった。しかし、集団部落政策によって、その勢力はおとろえ、1940 年には組織的な抗日運動が終了した。

今回の研究により、抗日武装組織の変遷やその歴史的背景を知ることができたが、当初目的とした抗日武装組織と渡辺の踏査範囲との関連性の追究にまではいたらなかった。満州・朝鮮を結ぶ鉄道路拡充の問題ともあわせて、大学進学後も研究を継続していく予定である。

【引用・参考文献一覧】

- 1) 満州は中国語では今日「満族」と呼ばれる民族の名称であり、中国東北部を指す地名ではないが、日本では一般に地名を指すものとして用いられている。またこの研究自体も日本の満州国建国前後の抗日武装組織とその掃討作戦についての研究であるので、本論では先行研究と同様に満州と記していきたい。
- 2) 匪賊という言葉には、ならず者・悪党という意味合いがあるが、本稿では、抗日武装組織の別称として使用する。

- 3) 加藤豊隆「満州国小史・満州国権力の実態について」 p26-27 より抜粋
- 4) 加藤豊隆「満州国小史・満州国権力の実態について」 p32-34 より抜粋
- 5) 加藤豊隆「満州国小史・満州国権力の実態について」 p93-95 より抜粋
- 6) 岩崎富久男「中国東北における救亡運動」より転載
- 7) 姜在彦『満州の朝鮮人パルチザン』p109 より抜粋

澁谷由里『馬賊で見る「満州」』 張作霖の歩んだ道 講談社 (2004)

岩崎富久男『中国東北における抗日救亡運動』

姜在彦『満州の朝鮮人パルチザン 1930年代の東満・南満を中心として』青木書店 (1993)

太平洋戦争研究会 『石原莞爾と満州事変』太平洋戦争研究会 (2009)

田中隆一『「満州国」軍の反乱』 東洋文化研究 11号

加藤豊隆『満州国小史・満州国権力の実態について』元在外公務員援護会 (1978)

加藤豊隆『満州国小史・満州国の地下組織について』元在外公務員援護会 (1978)

加藤豊隆『満州国小史・満州国の解体と警察』元在外公務員援護会 (1976)

満州国民生部警務司『満州国警察概要』満州国民生部警務司 (1935)

世界遺産都市 集安周辺の地図研究

那須円香

1 この研究をするにあたって

一昨年度から、本校の地域研究部では、「渡辺三三の撫順史研究」の調査を行ってきた。渡辺三三は戦前に永陵・集安・桓仁など、中国東北地方の遺跡調査を行った人物である。吉林省集安には多くの世界文化遺産があり、現在、観光都市として韓国・中国・日本などから多くの観光客が訪れている。観光都市となった集安について、「外邦図」「旧ソ連製地図」を比較してその変化を読み取ることにした。また外邦図（1933年作成）と旧ソ連製地図（1966～1977年に作成された地図をもとに1982年作成）以降の変化を調べるために、旧ソ連製地図と Google Earth の比較、研究を行った。

※「渡辺三三の撫順研究」『全国高校生歴史フォーラム 2018』

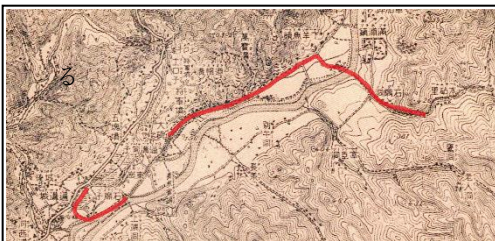
2 外邦図と旧ソ連製地図との比較

地図から読み取れる変化①

外邦図に見られない鉄道がソ連製地図には見られる。朝鮮側は満浦線（朝鮮総督府鉄道）、中国側は梅集線（満州国有鉄道）という。満浦線は1932年2月に全線が開通した。梅集線は1936年に建設が開始され1938年の5月に全線が開通した。その後、1939年には、朝鮮と満州を隔てる鴨緑江に両国をつなぐ満浦鉄橋が完成した。これにより満浦線と梅集線という2つの国営鉄道がつながり、国際鉄道となった。当時、日本の植民地であった満州国と朝鮮を結ぶために、日本の国策として鉄道を敷くことで、両植民地の一体化を進めていたと考えられる。

地図から読み取れる変化②

満浦鎮の南に位置するチャガン道シジュン郡を流れるチャンチャ川に、チャンチャ湖と言われるダム湖が建設された。このダムは水力発電と灌漑に利用されるためにつくられた。チャンチャ湖に近いチャガン道カンゲ市には、現在、北朝鮮の代表的な軍需工場が集まっており、これらの工場へ電力を供給していると推察できる。



旧ソ連製地図で鉄道が通っている部分に、外邦図では破線が見られる（左図、赤線部分）。これは、鉄道の開通予定地を表していると考えられる。

3 旧ソ連製地図と Google Earth との比較

かつて集安は、農業を産業の中心とする地方都市であった。旧ソ連製地図と Google Earth を見比べると町の規模が明らかに大きくなっていることがわかる。

町の特徴としては、同じような建物が、同じ方向を向いて建てられている。どれも高層建

築物である。建設途中の建物も多い。現在の集安市は、第二次産業である医薬品生産の増加、第三次産業である観光業の収入増加が見られる。これらのことから人口が増加していると考えることができる。

また東西に走る道幅が広く、ラウンドアバウトがいくつか見られる。このことから交通量が多く、発達した町であると言えることができる。

4 観光都市としての集安

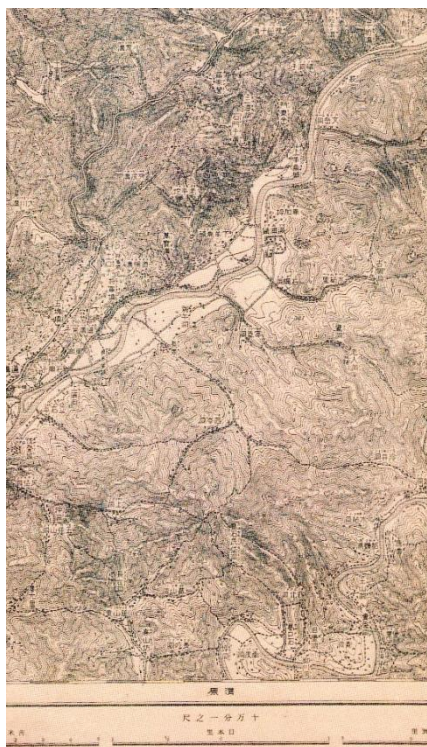
427年の平壤遷都まで高句麗の都があった集安市は、「古代高句麗王国の首都と古墳群」として2004年に世界文化遺産に登録された（国内城・丸都山城と正門付近の城壁・積石塚など）。その後、韓国の時代劇ドラマの舞台となった影響もあり韓国人観光客が増加している。世界文化遺産を活用した観光資源開発が急がれたため、集安の遺跡としての保存状態は非常に悪い。遺跡が観光用に作り替えられ、原型を留めていないものが増加している。

5 考察と課題

今回の研究を通して、中国の山間地域における1933年から2019年にかけての発展を3つの地図から読み取ることができた。集安は鉄道の開通と観光地化により大きく発展し、人口が増加したが、このような変化は近年、中国の地方都市の多くで見られる。集安市の都市拡大は、地方都市の発展のモデルケースと言えるのではないだろうか。発展の一方では、遺跡が観光用に作り替えられてしまっているという現実が存在している。過去の人々が残してくれたものは元には戻らないが、そこに存在したという形跡をこれからの未来に繋げなくてはならない。

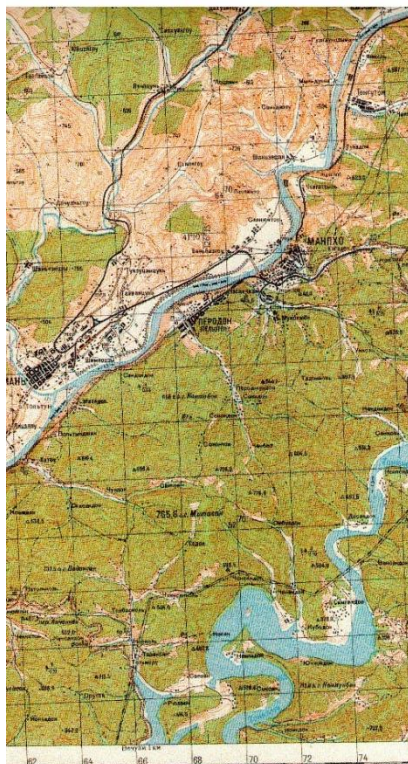
外邦図「満浦鎮」 岐阜県図書館所蔵

1933年(昭和8年)発行



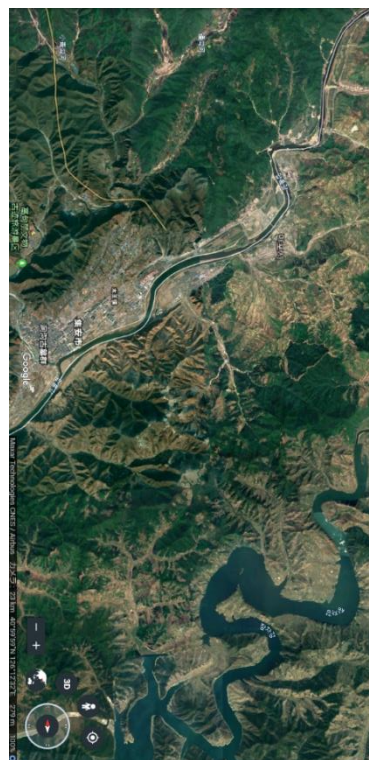
旧ソ連製地図「満浦」 岐阜県図書館所蔵

1982年(昭和57年)発行



Google Earth

2019年(令和元年)



日本考古学協会総会の報告(2018年5月31日)

◇ 日本考古学協会総会高校生ポスターセッションに参加しました！

日時：2018年5月31日(日) 17:00～18:00

主催：日本考古学協会 参加者：地域研究部 9名

内容：「よみがえる渡辺三三資料 ～文化財の保全と活用に関する実践報告～」

◇ 渡辺三三の略歴と旧蔵資料の紹介

渡辺三三氏(わたなべさんぞう、1890～1977)は、1910(明治43年)、旧満州(現中国東北地方)で小学校教員や撫順図書館長を務めるかたわら、撫順を中心とした地域の歴史を熱心に研究し、高句麗や女真の研究等で多大な成果を挙げた人物。

地域研究部では、今回、岐阜県安八郡輪之内町にお住いの渡辺充氏(三三のお孫さん)を訪問し、三三所蔵の考古遺物や写真、書籍を研究する許可をいただきました。いずれも貴重な資料であり、お預かりした所蔵品の整理・研究を進め、研究成果の一部を、2018年5月27日に行われた日本考古学協会において発表しました。貴重な文化財は以下の通りです。



○考古遺物 新石器時代の磨製石器 10点(石包丁、環状石斧、磨製石斧等)、銅鏃4点

○写真 高句麗や女真等、旧満州の史跡調査に関わる写真

○書籍 歴史・考古学研究の研究論文抜刷、学術書、雑誌等

◇ 当日のようす

明治大学駿河台キャンパスに到着し、高校生ポスターセッションの会場へ。朝から大勢の研究者が来場。緊張気味の生徒9名、研究者の前で代わる代わるプレゼンに臨みました。石器や青銅器の実測やトレース、古い写真の整理、近代日本のアジア政策と学問との関わりなど、自分たちの学びの成果を発表する中で、研究者の方々から質問や意見、具体的なアドバイスをたくさんいただきました。今回は本校を含め12校が参加。考古学や歴史学を志す高校生とも交流ができ、有意義な一日となりました。

◇ 生徒の感想より

■今回のポスターセッションを終えて一番に出てくる感想は、「今までの人生でこんなに言葉を発したことはない」です。途中で数えるのをやめたほど、大勢の人に説明を繰り返しながら、疲労は確かに大きかったものの、それを上回る楽しさを感じていました。

相手は百戦錬磨の専門家の方々で、当然始まった直後は緊張しました。しかし時間の経過に連れて自分でも驚くほど舌が回りだし、数人に説明を終える頃にはまったく物怖じせず話すことができるようになっていました。「自分の勉強し練習してきたことは、専門家に対しても通用する」。そう自信をもてた時には感無量でした。

高校生である身でこのような経験をさせてもらえたことは本当に有難いことでした。興味はあったものの他にやりたいことがあったため断念した人文学の分野に、少なからず残っていた未練を解消できたこと、多くの研究者の方々から「大学での研究と遜色ないこ

とをやっている」とほめていただいたことは、私事ですが僕の誇りとなりました。直接今回の経験がこれから役立つとは限りませんが、今後の僕の人生でこの経験がプラスに働くことは間違いなくと思います。このポスターセッションを支えてくださった全ての方々に感謝をし、引き続きの研鑽を恩返しとしたいと思います。

■僕は地域研究部が「楽な部活」だと思って入ったので、今回の活動は想定外でした。しかし、実際にやってみるといい経験になったと思います。例えば、人前で話すことに慣れることができたことです。約 10 人以上の人にプレゼンを行なったので、この経験を学校の SGH 研究発表にも生かしていきたいです。それに発表のときに質問をされるのが少しだけ楽しく、うれしく感じられたので、今までとは違う自分が見えた気がしました。他にも、研究を知るだけではなく時代背景についても学ぶことが大事だと知れました。今後、このような機会があったらまた携わりたいと思いました。

■今回のプレゼンを通して思ったことは、とりあえずいろいろ学ぶことができたということです。やはり仲間内でやっているだけでは気づけないこともあり、指摘されて見えてきた課題を今後の企画展に向けて改善していきたいと思います。例えば、三三さんは見つけた石器を小学生の教育に活用したのかなどです。又、今後研究していく中で細かいことでも「どうしてこうなのか」ということに対しての証拠と確かな正確さを大切にしていきたいと思いました。

■今日、初めて、専門家の前で研究発表して、とても緊張しましたが、最後までやりきることができて良かったです。とても貴重な経験をすることができました。また、会場に駆けつけてくださった関高の先輩からは、今後の進路にも触れたアドバイスをいただいたので、進路決定などに生かしていきたいと思いました。実測やトレースなども大変だったけど、貴重な体験をすることができて嬉しかったです。

■他の高校との交流や、専門家の説明を聞くことはポスターセッションならではの体験で、来年もまた行きたいと思いました。国立博物館や明治大学の博物館など、岐阜県にいただけでは到底見るもののかなわないような様々の歴史的遺産を見学できたので、今日の充実した 1 日を通して学んだ歴史をしっかりと理解したいと思います。



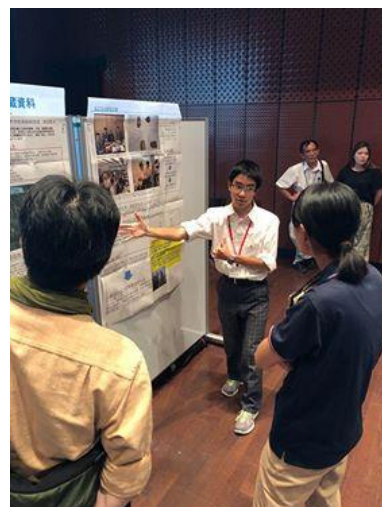
全国高等学校歴史学フォーラム（2018年8月4日）

◇ 博物館・生涯学習・SDGs・博学連携



博物館は「資料の収集・保管・展示による教育、調査研究」を一体として行う機関であり、人々が、モノを通じて文化・歴史・自然を考え学ぶ場です。扱う対象も、古文書や考古資料、美術品、自然史・科学史資料など多種多様ですが、いずれも先人が守り伝えてきた貴重な遺産です。

博物館は「社会教育・生涯学習のための施設」。近年では地域の学習拠点として、子どもたちへの体験型学習の機会提供や、ボランティア等の協力を得た博物館活動、地域活性化のための活動など、社会との活発なコミュニケーションに基づく活動が広がっており、「博物館」のイメージをダイナミックに変えています（文部科学省「博物館 - これからの博物館」2011を参照）。生涯学習の機会促進（icon4 target1・7ほか）、文化遺産保全（icon11 target4）は、SDGsに盛り込まれた目標でもあります。



関高校地域研究部は、岐阜県博物館と連携した活動（博学連携事業）として、今回の研究活動を行いました。さらにその成果を、日本考古学協会（於：明治大学）や歴史学フォーラム（於：九州国立博物館）の場において発表しました。秋には岐阜県博（9月11日～10月21日）で企画展を実施する予定です。

◇ 2018全国高等学校歴史学フォーラム

2014年にスタートした「全国高等学校考古学フォーラム」は、より多くの高校生が参加できるよう、2017年より「全国高等学校歴史学フォーラム」と名称を変更し規模を拡大しました。今年は、北は福島県から南は大分県まで、7県10校の高校生が集い、九州国立博物館で日頃の活動成果を発表しました。メインイベントである参加各校によるポスター掲示（13:00～16:30）、研究内容の口頭プレゼンテーション（13:00～16:00）のほか、太宰府天満宮本殿見学、実験タイム（きゅーはく石器 de クッキング!）、博物館バックヤードツアーなどの催しもあり、他校生徒とともに、歴史を深く学ぶことができました。

日 時： 2018年8月4日 13:00～16:30

場 所： 九州国立博物館 1F ミュージアムホール

参加者： 歴史研究系部活動所属している生徒（7県10校）

関高校からは地域研究部員1名が参加（3年7組 西部寛太君）

本校発表テーマ 「よみがえる渡辺三三旧蔵資料」

http://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf/h30_sghjoho_5.pdf

主 催： 九州国立博物館



九州大学総合研究博物館



九州国立博物館



歴史学フォーラム参加者で記念撮影



太宰府天満宮本殿を拝観



九州国立博物館のバックヤードツアー。普段は絶対のぞけない収蔵庫や文化財の修繕の様子を案内していただきました。

◇ 発表者の感想

このたび私は、九州国立博物館にて開かれた全国高等学校歴史学フォーラムに参加させていただきました。

私は「文化財の保全と活用について考える」というテーマで、岐阜県出身の歴史研究家、渡辺三三が旧満州から持ち帰った考古遺物や写真、書籍を研究しました。この研究は私ひとりで行ったわけではなく、関高校地域研究部全員で行ったものです。ですから、「みんなで研究した成果、そしてこれから私たちがどのように文化財を後世に伝えるべきかを聞き

に来てくださる方に伝えたい」という強い思いを持って臨みました。

来場者のみなさんが私の説明をととても熱心に聞いてくださって、質問や貴重なアドバイスも数多くいただきました。これからの研究そして自分がレベルアップするチャンスをいただけたことに対する感謝の気持ちで一杯です。また他の高校の発表を見たり、情報交換をしたりしてとても刺激的で有意義な時間でした。

今現在、国立博物館で高校生が研究発表をする機会は、九州国立博物館しかないそうです。私自身今回参加して、この「歴史学フォーラム」は非常に良い機会だと思いました。実際、私は説明をしている際、お客さんや研究者の方からアドバイスや新たな情報をいただいたりして、視野が広がり、考え方が多角化しました。また、歴史学や考古学には興味のない方が、興味を持つきっかけになると思います。このフォーラムはとても重要だと思います。ぜひ九博の方にはこれからもフォーラムを続けていただきたいと願っています。そして来年も関高校からこれに参加してほしいと願っています。今回、参加できて本当に良かったです。ともに研究した仲間、支援してくださった先生方、博物館の方に感謝しこの経験を今後に役立てます。



岐阜県博物館企画展の報告（2018年9月29日）

◇ 県博企画展「東アジア史の案内人 渡辺三三旧蔵資料の研究」と公開講座

岐阜県輪之内町出身の渡辺三三（さんぞう）は、旧満州で小学校教師や図書館長を務める傍ら、遺跡の踏査や研究を行いました。収集した環状石斧・磨製石斧・銅鏃、愛新覚羅溥儀の家庭教師ジョンストン(映画「ラストエンペラー」に登場)を遺跡案内した時の写真などを、岐阜県博物館本館 4 階・人文展示室前に展示してあります（9 月 11 日～10 月 21 日）。関高校地域研究部では、下記の通り今回の企画展にあわせて公開講座を実施しました。

日 時： 9 月 29 日(土) 14:00 ～ 16:00 場 所： 岐阜県博物館講堂

内 容： 関高生による研究発表

講演「勃興期の清朝 ～ヌルハチと撫順地方～」（寺内威太郎明治大学教授）

寺内教授からは、清朝初代皇帝ヌルハチの活動を軸に、撫順地方を舞台とした勃興期の清朝のお話がありました。清朝初期の歴史を、文献と遺跡の双方から丹念に調査した渡辺三三の業績の偉大さを知ると同時に、植民地統治時代の厳しい現実や歴史学界の動向についても学びました。

当日の会場には、今井涼子先生（考古学者、九州国立博物館）、藪下浩先生（考古学者、関高出身）も駆けつけてくださいました。高屋嘉文先生（県立岐阜商業副校長、岐阜県博物館前学芸部長）からは、「岐阜県出身の人物とその仕事を岐阜の高校生が探究する。そして、時間をさかのぼり、日本から東アジアさらに世界へつながる。小さな展示ですが、とても大きな研究だと思います」とのご講評をいただきました。





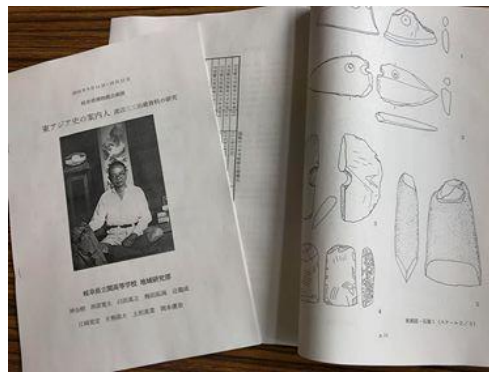
展示の案内板



遺物の展示レイアウト



写真パネルも展示



企画展用パンフレット



展示の様子



関高生の研究発表



司会も関高生が担当しました



寺内威太郎教授による講演



講演後も質疑応答が続きました



渡辺充氏、寺内先生と記念撮影

岐阜県博物館での企画展終了後は、岐阜県図書館でも展示を予定しています（11月13日～25日）。岐阜県図書館地図センターには、陸軍参謀本部陸地測量部作製の十万分の一外邦図の複製品があります。渡辺三三や三上次男も、かつてはこの地図を頼りに踏査を行いました。このほか、地図センターには、戦後、ソ連が作成した中国地図も保管されています。日本陸軍の地図より正確に測量されていますので、こちらのほうが、渡辺や三上が踏査した時代の地形をより正しく伝えていられると考えられます。

県図書館の展示では、このような旧満州の古地図を取り入れた展示を計画しています。

全国高校生歴史フォーラムの報告（2018年11月17日）

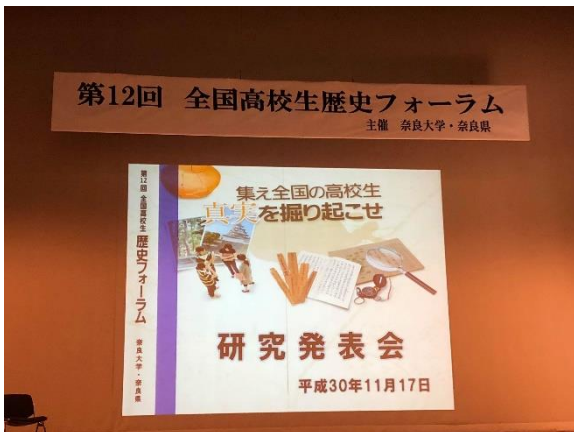
◇ 第12回全国高校生歴史フォーラムで、優秀賞・学長賞を受賞しました！			
日時：	平成30年11月17日	会場：	奈良大学
主催：	奈良大学 奈良県		
発表者：	片桐昂大 江崎晃定	（地域研究部2年）	

全国高校生歴史フォーラムは、歴史、地理、史跡、文化財、文学、人物などに関わる探究活動の成果をレポートにまとめ競うコンテストです。今回、関高校地域研究部は、岐阜県出身の歴史家、渡辺三三の研究活動やその近代史的意義を考察した成果をレポートにまとめ、コンテストに応募しました（「渡辺三三の撫順史研究 植民地支配と歴史学」）。

結果、応募総数73作品のうちの優秀賞（上位5作品）に選ばれ、さらに11月17日に奈良大学で行われたプレゼン大会では、学術性の高さが評価され、奈良大学学長賞を受賞しました。

表彰式終了後、発表者の片桐昂大君は、「近現代史に関心があり、旧満州の植民地統治に興味を持った。歴史の暗部に焦点をあててみたかった」、江崎晃定君は「他校の生徒の優れた研究に刺激を受けた。緊張しながらも自分たちの研究成果をしっかりと伝えられた」と感想を述べていました。

翌日は、奈良大学の関根俊一教授（副学長、美術史）、土平博教授（歴史地理学）のご案内によるフィールドワークに参加しました。東大寺、興福寺、元興寺、さらに奈良町界限を、専門家による丁寧な説明を聞きながら見学することができました。



全国総文祭岐阜県大会の報告（2018年10月14日）

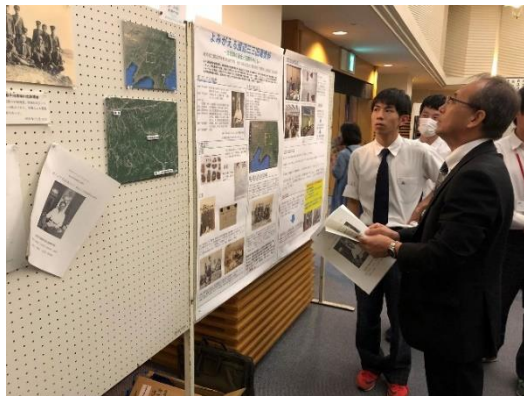
◇ 全国高等学校総合文化祭岐阜県大会地域研究部門で優秀賞を受賞！

日 時： 平成30年10月14日（日） 会 場： 瑞穂市総合センター
主 催： 岐阜県高等学校文化連盟 発表者： 梅田拓海（地域研究部2年）

この1年、地域研究部は、県内に保管されていた旧満州の歴史に関わる文化財（考古遺物・写真・書籍等）の史料価値を明らかにするとともに、その保全や活用につなげる実践的活動を行いました（SGH 情報 24・37号）。

「よみがえる渡辺三三旧蔵資料」と題した研究成果に関しては、日本考古学協会総会高校生ポスターセッションや、全国高等学校歴史学フォーラム（九州国立博物館）、岐阜県社会科作品展で発表したほか、岐阜県博物館や岐阜県図書館で特別展示や公開講座を実施し、研究成果の普及活動に努めました。

10月14日、瑞穂市総合センターで行われた全国高等学校総合文化祭岐阜県大会地域研究部門発表会では、今までに発表した研究内容をさらに深め、ポスター2枚にまとめて発表しました。結果、優秀賞を受賞し、次年度、佐賀県で行われる全国高等学校総合文化祭に、岐阜県代表として参加することになりました。



全国総合文化祭の報告（2019年7月29～31日）

◇ 佐賀県で行われた全国総合文化祭に参加しました！

日 時： 令和元年7月29日(月)～31日(水) 参 加： 地域研究部員 2名

佐賀県で行われた全国高等学校総合文化祭郷土研究部門に、地域研究部員2名が参加し、一昨年度から継続している渡辺三三（わたなべさんぞう）旧蔵資料と満州国で策定された観光開発計画について発表を行いました。観光開発計画の存在に関しては、今回の研究で得られた新知見といえます。水準の高い研究が次々と発表され、本校生徒も大いに刺激を受けました。佐賀県の先生方、生徒さんのご案内で、佐賀県内の史跡や博物館をめぐる巡検にも参加しました。



全国高等学校歴史学フォーラムの報告（2019年8月3・4日）

◇ 全国高等学校歴史学フォーラムに参加しました！

日 時： 令和元年8月3日(土)・4日(日)

参 加： 地域研究部・文芸部員 各1名

九州国立博物館で行われた全国高等学校歴史学フォーラムに参加しました。関高校の参加は今回で3回目となります。岐阜県出身の作家であり考古学者でもあった江馬修（えま なかし）の業績について、郷土史と文学の双方から分析を試みました。専門家以外に、一般の方々が多く来場され、ご意見や質問を多数いただきました。他校の生徒さんや先生方との交流時間もあり、歴史についてのたがいの意見を交流し合うよい機会となりました。



全国高校歴史フォーラムの報告（2019年10月11日）

◇ 第13回全国高校生歴史フォーラムの報告です！

日 時： 令和元年10月11日(金)

奈良大学ウェブサイトで発表

<http://www.nara-u.ac.jp/forum/result/index.html>

主 催： 奈良大学 奈良県

受賞作： 撫順東方における歴史観光構想とその挫折

～まぼろしに終わった歴史ツーリズムを読み解く～

参加者： 江崎晃定 梅田拓海 片桐昂大 辻 龍成 岡本優奈 土田真菜
石原伶緒 吉川奎騎（地域研究部）

全国高校生歴史フォーラムは、歴史、地理、史跡、文化財、文学、人物などに関わる探究活動の成果をレポートにまとめ競うコンテストです。

昨年度、関高校地域研究部は、岐阜県出身の歴史家、渡辺三三の研究活動やその近代史的意義を考察した成果をレポートにまとめ、コンテストに応募しました（「渡辺三三の撫順史研究 植民地支配と歴史学」）。結果、応募総数 73 作品のうちの優秀賞（上位 5 作品）に選ばれ、奈良大学で行われたプ



レゼン大会では、学術性の高さが評価され、奈良大学学長賞を受賞しました。今年度は昨年度に引き続き、渡辺三三に関わる研究を継続し、コンテストに応募しました（「撫順東方における歴史観光構想とその挫折 まぼろしに終わった歴史ツーリズムを読み解く」）。結果は応募総数 143 編のうち上位 12 位以内、佳作を受賞することになりました。第一執筆者の江崎晃定さんは「二か年にわたる一連の研究により、学者の調査の背景には、軍の作戦や観光開発計画、さらに朝鮮・旧満州を縦断する鉄道敷設計画があったことが明らかになった。ジャーナリズムや研究者と植民地統治との関わりを、新聞記事をはじめとする当時の史料で浮き彫りにすることができたと思う。大学進学後は研究をさらに発展させたい」と抱負を語っています。

後 記

このたび「岐阜県立関高等学校地域研究部報告」と題し、地域研究部部誌を創刊する運びとなった。記念すべき創刊号は「渡辺三三旧蔵資料」の特集とした。

本校地域研究部の前身・社会研究部（以下社研部と略）は、関市赤土坂や富加町海老山の旧石器遺跡、千疋陽徳寺古墳群など、研究史上著名な遺跡を含む関市内外の遺跡調査を次々に行なったことで知られる。のちに岐阜県考古学界を主導する故吉田英敏氏（高校13回生）が部員・OBとして活躍された昭和30～40年代が、おそらくは社会研究部が最も活動的だった時期であったと考えられる。当時発刊されたガリ版刷の「調査報告」や、美濃加茂市民ミュージアムに寄贈された吉田コレクションは、当時の関高社研部の活動を伝える貴重な資料である。

その後社研部は、平成22年度より地域研究部（以下地研部）と名を改めて現在にいたっている。一時は部員数も減少し存続すら危ぶまれたが、長屋幸二氏（岐阜県博物館人文係長）の顧問就任（平成28年度）を機に、中池周辺の遺跡踏査、臨済宗妙心寺派の古刹梅龍寺の石塔調査、下呂石を使った実験考古学など、かつて盛んであった考古学調査を軸に、関市内外の郷土史研究を再開することとなった。

そんな折、岐阜県博物館から突如舞い込んだのが、渡辺三三旧蔵資料の一件であった（平成29年10月）。渡辺は、戦前・戦中、現在の中国遼寧省撫順市で活動した東洋史家・考古学者で、古文献に登場する玄菟郡治や高句麗新城、清朝勃興期の都城フェアラの発見など、目覚ましい成果を挙げた人物である。われわれ地研部は、渡辺が敗戦とともに郷里輪之内町に持ち込んだ石器や銅鏃などの遺物、調査のスナップ写真や論文抜刷等を預かり、その中身を精査することにした。以下に解題する論文はその成果をまとめたものである。

（１）「渡辺三三の撫順史研究 ～植民地支配と歴史学～」

渡辺がフィールドとした撫順東方の山岳地帯は、日本に抵抗する武装組織（抗日パルチザン）の拠点でもあった。我々は、渡辺家に残されていた写真や論文抜刷、関連資料を精査することにより、渡辺の調査が満州国当局や日本軍によるパルチザン掃討作戦と深く関わりながら進められた経緯をつきとめ、当時の学問と政治の在り方についても考察を行った。

本研究は、2018年度「第12回全国高校生歴史フォーラム」（奈良大学・奈良県主催）において優秀賞・学長賞を受賞し「発表集」にも掲載されている。

（２）「撫順東方における歴史観光構想とその挫折 ～まぼろしに終わった歴史ツーリズムを読み解く～」

2018年9月に渡辺家から新たに発見された新聞スクラップの分析を通じ、軍による掃討作戦や渡辺らの考古学調査が、撫順東方を舞台とした歴史観光開発と結びついていたこと、さらにその背景に日中戦争の開始とともに始まった満州・朝鮮をつなぐ鉄道工事があったことを明らかにした。

本研究は、2019年度全国高校生歴史フォーラム（奈良大学・奈良県主催）において佳作を受賞した。

（３）「東洋史家渡辺三三の業績とその生涯」

『濃飛の文化財』第57号（岐阜県文化財保護協会2018）掲載の原稿である。岐阜県文化財保護協会よりの依頼により、学者としての渡辺の業績とその生涯を評伝としてまとめた。

（４）「満州の抗日武装組織とその掃討作戦」

令和元年度卒業生（高校第72回生）の江崎晃定さん執筆の研究ノートである。江崎さんは同級生の片桐昂大さんとともに、渡辺三三旧蔵資料を分析するにあたって近代史分野を担当し、抗日武装組織掃討作戦と渡辺らの調査が密接に関わることをつきとめた。江崎さんは大学で日本近代史を、片桐さんは日本政治史を専攻したいとのことである。益々の研鑽を期待したい。

（５）「世界遺産都市 ～集安周辺の地図研究～」

岐阜県図書館所蔵の陸軍参謀本部作成地図や旧ソ連製地図、Google Earth を使った地図研究である。那須円香さん（令和元年度2年生）が、地図の観察・分析結果から、交通網や産業の発展、観光開発の軌跡を読み取りポスターにまとめた。今回部誌に掲載するにあたって、読みやすくするためにポスターを論文形式に作り替えた。ポスターは、2019年度児童生徒地図作品展（岐阜県図書館主催）で入選した。

（６）「渡辺三三旧蔵資料の研究経緯」（「関高SGH情報」より）

本校地域研究部では学術的探究に加え「研究成果を広く一般に公開する」「教育活動や観光開発等に研究成果を生かす」ことを目的とした活動を行っている。こうした活動は、本校教育活動の根幹をなすSGH（スーパーグローバルハイスクール）事業の一環でもある。本稿はウェブサイト上で公開している「関高SGH情報」から抜粋し作成した。

（地域研究部顧問 林 直樹）

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

創刊号

発行：令和2年3月31日

発行所：岐阜県立関高等学校

岐阜県関市桜ヶ丘2-1-1

電話 0575-22-5688

FAX 0575-23-7089

岐阜県立関高等学校地域研究部